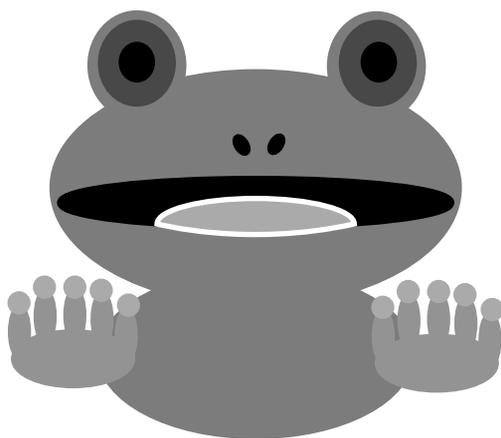


# 「ひらく」から 「つなぐ」へ みんなでつくるコムケア物語の2年目

住友生命社会福祉事業団  
コミュニティケア活動支援プログラム  
2002年度 活動報告書



住友生命社会福祉事業団

コミュニティケア活動支援センター

コミュニティケア活動支援センターは住友生命社会福祉事業団より本プログラムの実行事務局を受託している組織です。

# みんなで作るコムケア物語

## 2年目のテーマは「ひらく」から「つなぐ」です

住友生命社会福祉事業団の支援で始まった、コミュニティケア活動支援プログラムは、2年目もさまざまな活動に取り組みました。

福祉やまちづくりの世界に新しい風を起こしたい。  
これまでなかったような、市民活動を支援する仕組みを創りたい。  
これが、コムケア活動という言葉に込めた、私たちの思いでした。  
全国のコムケア仲間を支えられて、今年もすこ〜しだけ、風を起こせたかもしれません。

### 1年目（2001年度）は「ひらく」がテーマでした。

忙しさの中で、とすれば個別のテーマや自分たちの活動に閉じこもりがちな福祉活動や社会活動を、外に向けて開いていくことで、新しい発見や展開が実現できるのではないかと考えたのです。私たち自身の活動も、迷いや悩みを含めて、できるだけ公開していくことに心がけました。そうすることで、関心を持ってくれた人たちの知恵と汗を借りることができるからです。市民活動で得たノウハウは、社会の財産です。お互いに活かしあう事で、ノウハウはさらに進化していくと、私たちは考えています。

資金助成先の選考も、応募してくれた人まで巻き込んで、公開方式で決定してきました選考経過もできるだけオープンにし、活動支援に限ってはありますが、支援先にならなかったところには、すべてその理由を届けることもさせてもらいました。

お叱りを受けたこともありましたが、エールももらいました。エピソードには事欠きません。そこから得たノウハウと自信は大きな財産になりました。

### 2年目（2002年度）のテーマは「つなぐ」でした。

開く姿勢を持った、さまざまな団体や活動を、分野を超えてつないでいくことの価値は、初年度の活動の中で確信できました。そこで、2年目は「つなぐ」をコムケアセンターのミッションにしたのです。とてもうれしかったのは、2年目の資金助成プログラムへの応募団体の多くが、非常にオープンマインドで、ネットワーク志向が強かったことです。最終選考会前日のリハーサルは、競合関係にあるにもかかわらず、お互いにアドバイスしあう関係が生まれ、感激しました。

日本にも新しいNPOが育ちはじめています。うれしいことです。  
そして、いくつかの活動が少しずつですが、つながりはじめています。

### 3年目（2003年度）のテーマは「創る」です。

つながりの中から、新しい物語を創っていくことを目指すことにしました。  
2年目の総括として開催した、コムケアフォーラム2003 in 東京は、そのプロローグになりました。次の報告書では、きっといくつかの新しい物語をお伝えできます。

**「常に新しさを追求する」。**これもコムケアセンターが大切にしてきたことです。

私たちのプログラムは、あまり前例のないスタイルだったと自負していますが、その考えは少しずつですが、広がりだしています。公開選考会や資金面以外での支援、助成金の使途の自由さ、問題の捉え方の広がり、そうした発想が受け入れてもらえるようになってきました。「バザール型」をうたった、コムケアフォーラム2003 in 東京も、同じようなフォーラムが広がりだしています。うれしいことです。

しかし、常に新しさを追求するコムケアセンターとしては、その先をみつけないかねばなりません。

本報告書は、こうした活動の2年目の記録です。  
新しい動きの予兆を感じてもらい、ぜひこの活動への参加をお願いしたいと思っています。

2003年10月10日  
コミュニティケア活動支援センター  
事務局長 佐藤修



## 第1部 プログラムの概要と活動概要

1. プログラムの概要	4
2. 資金助成プログラム	5
3. 活動支援プログラム	7
4. 交流支援プログラム	8
5. プログラムへの評価	10
6. 資金助成プログラム選考委員講評	11
7. 応募団体一覧	14

### このプログラムを通して実現したいこと

#### ○安心快適社会に向けての「大きな福祉」への関心の醸成

福祉というと、高齢者介護とか障害者支援などの直接的な問題解決に目が向きやすいが、将来的な問題も含めて、すべての人が安心して快適に暮らせる社会づくりを「大きな福祉」と捉え、そうした活動への助成を通して、社会における「大きな福祉」「安心快適社会の実現」への関心を高めていく。

#### ○さまざまな市民活動をつなげる共創型相互支援の輪づくり

実際に市民活動に取り組んでいると、忙しさの中でなかなか外部に目を向ける余裕がなくなり、タコツボにおちいりがちだが、効果的な活動をしていくためには、さまざまな市民活動が連携し支えあっていくことが必要である。テーマを超えて、さまざまな市民活動が学び合い、支え合う「共創型相互支援の輪」を広げていく。

# 1. プログラムの概要

このプログラムは、みんなが気持ちよく生活できる社会に向けて、さまざまな活動に取り組んでいる市民活動団体や個人を支援することを目的としています。

資金助成が中心に置かれていますが、単なる資金助成プログラムではなく、応募された市民団体と一緒に、お互いに支援しあえる関係を育てていこうということを理念としています。つまり、資金だけで支援する側と支援される側に分かれるのではなく、資金以外のものも含めて、お互いに支援しあえる関係を育てていくことを目指した、活動の輪づくりプログラムです。

市民活動のネットワークの大切さは多くの人が指摘していますが、こうしたプログラムは実際にはまだ少ないように思います。ただ仕組みを構築すればいいわけではないからです。実際に参加した人たちが、自らの課題を超えて、あるいは現実の忙しさを超えてつながっていくことは、口で言うほど簡単なことではありません。現実的な効用がなければいけません。それに、市民活動に取り組んでいる人たちは、当面の課題に追われがちで、ほかの問題に目を向ける余裕がなかなか持てないのも現実です。

しかし、社会の複雑さを考えれば、個別課題への対応だけで対応できることには限界もあります。一見、関わりが少ないように見える問題が、深くつながっていることも少なくありません。個別課題を超えて、活動をつなげていくことが、問題解決にとってとても大切になってきています。

このプログラムが対象にするテーマは、「大きな福祉」に向けての「コミュニティケア」です。このプログラムでは、みんなが気持ちよく生活できる社会（大きな福祉が実現している社会）に向けての活動はすべてコミュニティケア活動と考えています。ですから、なんでも対象になります。これに関しては、プログラムの性格が曖昧になるという意見もありましたが、私たちは敢えて切り口をできるだけ広げたいと思っています。それが大切だと考えるからです。

## ■目的：支えあいの輪づくり

次の2つがこのプログラムの目的です。

- ①コミュニティケアの分野で活動している（あるいはこれから活動しようとしている）市民活動団体の、新しいプロジェクトを支援すること。
- ②そうしたことを通して、さまざまな市民活動のつながりをつくり、お互いに支援しあえる市民活動の輪を育てていくこと。

## ■支援形態：共創型相互支援の関係

資金助成だけではなく、応募された市民団体の活動に関し

て、可能な範囲で何でも相談に応じることにしていますが、それを可能にしていくために、応募された市民団体にも自らの強みを活かして、他の団体の支援に参加していただく仕組みになっています。

つまり、支援する側と支援される側に分かれるのではなく、お互いに支援しあえる関係を育てていくことを目指しています。したがって、参加（応募）したみなさんにも、自分たちの強みを公開してもらい、できる範囲で「支援する側」でも活動してもらうことを呼びかけています。

## ■具体的なプログラム構成：毎年、参加者の意見を踏まえて進化させていきます

### (1) 資金助成プログラム

- ①コミュニティケア活動支援（一律 50 万円）
- ②コミュニティケア調査研究支援（一律 100 万円）

### (2) 活動支援プログラム

活動に関するすべての相談に可能な範囲で応じ、このプログラムに関わってくださったみなさんを巻き込みながら、問題解決に努力します。

### (3) 交流支援プログラム

参加した人たちが交流し、学びあえる場を、さまざまなかたちで創出していきます。

## 3つのキーワード

### ◆大きな福祉

社会にあるさまざまな問題を、みんなが自分の問題として共有化し（つまり当事者になって）、みんなが知恵と汗を出しあいながら、みんなにとっての新しい価値（積極的な解決策）を創出していくこと。これが、私たちが考える大きな福祉です。

福祉というと、介護や高齢者問題など、特別の問題をイメージしがちですが、私たちの生活や社会はさまざまなものが複雑に絡みあっています。ですから、個々の問題ごとに解決していくと同時に、それらをつなげていくことが必要です。

### ◆コミュニティケア

コミュニティケアという言葉は、一般的には、「さまざまなハンディをもつ人々を、隔離された施設ではなく、地域社会の中で、自立した生活が送れるように支援しようとする考え方」とされていますが、私たちはもっと広義に捉え、「お互いに気遣い合いながら、放っておけないことに対して、それぞれが出来る範囲で汗と知恵を出しあうこと」と考えています。

コミュニティとは「重荷を背負いあった人間のつながり」ですが、私たちは最近、重荷を背負いあう関係を捨ててきたように思います。しかし、重いので捨ててしまった重荷の中

に、実はとても大事な宝物があったのかもしれませんが。そんな思いもあって、改めて重荷を共有する、人と人のつながりを大事にしていきたいと考えています。

#### ◆共創型相互支援の輪

コムケア活動は、誰かが誰かをケアするという一方向的な活動ではありません。参加した人が、お互いに支援し支援される双方向的な関係を目指しています。ケアすることで実は自らがケアされていることに気づけば、活動は永続し広がっていくはずです。

やや気負って言えば、この活動を通して、社会に、「ケアしあう文化」の風を吹きこみ、さまざまな活動を「大きな福祉」に向けてつないでいきたい。それによって、相互支援の輪をみんなで育てていきたいと考えています。

共創とは、一緒に汗と知恵を出し合って、新しい価値を創りだしていくことです。

## 2. 資金助成プログラム

コミュニティケアに関わる活動に取り組んでいる団体やこれから取り組もうとしているグループの新しいプロジェクト起こしを中心に、1団体50万円（総額1300万円）の資金助成を行っています。

### (1) 募集活動

6月30日のコムケアフォーラムで募集要項を発表し、8月24日までの期間、募集を行いました。

#### ○募集案内のチラシの配布

チラシは3000部を作成し、全国の福祉関係やNPO関係の組織に郵送したほか、関係者が集まるところに配布しました。コムケア仲間やこれまでの応募団体にも配布の協力をお願いしました。

#### ○メール

コムケア・メーリングリストを含め、20を超える福祉関係やNPO関係のメーリングリストで発信しました。そこから、転送されたものも少なくありません。

#### ○コムケアセンターのホームページ

ホームページでも情報提供しましたが、3000件を超えるアクセスがありました。

#### ○直接の呼びかけ

コムケアフォーラムや地方交流会（仙台、大阪、長野、熊本）

などで、直接の呼びかけや相談会も開催しました。

#### ○他の組織の広報紙やホームページ

こうした情報提供の結果、行政やNPO支援組織、ボランティアセンターなどが、ホームページや広報紙で広報してくれました。

#### ○新聞

朝日新聞をはじめとした新聞数紙が募集案内を掲載してくれました。

### (2) 応募に関する相談

応募段階から相談に応じました。相談内容は申請書の書き方などが中心でしたが、プロジェクト起こしそのものや団体の運営に関わるものもありました。電話やメールが中心でしたが、直接、事務所まで相談にくる団体もありました、遠くは神戸や群馬からの来訪もありました。資金助成とは関係なく、活動支援がはじまったものもあります。

### (3) 応募状況

応募件数は総数169件（活動134件、調査研究35件）でした。

#### ■地域別分布

	活動支援	研究支援	合計
北海道	4	1	5
東北	6	4	10
関東	72	17	89
中部	15	3	18
関西	23	6	29
中国四国	5	2	7
九州沖縄	9	2	11
合計	134	35	169

#### ■対象別分布（活動支援）

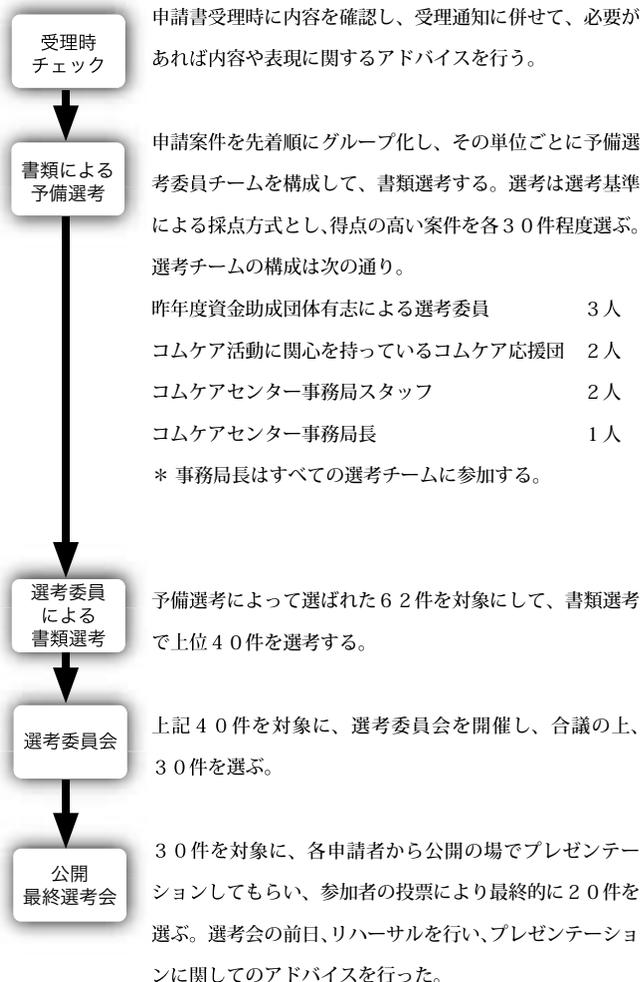
高齢者	23	女性	5
障害者	31	介護者	4
こども	21	ホームレス	4
子育て	29	スポーツ	4
地域福祉	21	環境	3
芸術文化	9	国際交流	3

### (4) 選考方法と選考基準

選考の進め方はホームページで公開し、途中でも選考がどう進んでいるかわかるように報告を行いました。選考方法に関しては、調査研究支援は選考委員会で決定されましたが、活

動支援に関しては、できるだけ多くの人に内容を評価してもらい、最終的には応募者も参加できる公開選考方式をとりました。最終選考会での投票得票数もホームページなどで公開しました。大きな流れは次の通りです。

## ■活動支援関係



### (選考基準)

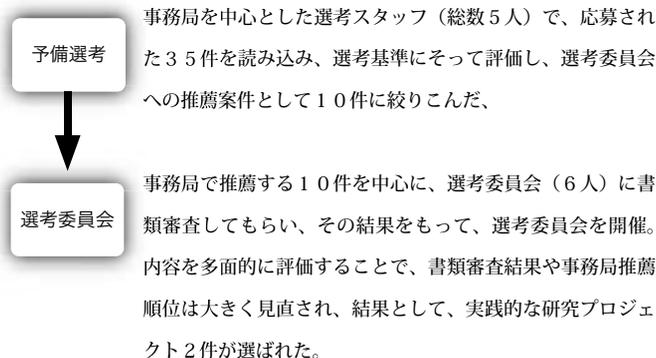
選考は次の基準による採点方式。但し、公開最終選考会では個別基準審査ではなく、総合的な評価によった。

- ① 社会性：本プログラムで定義するコミュニティケアの理念に沿っていること
- ② 新規性：これまでの活動の延長ではなく、新しい活動起こしであること
- ③ 先進性：これまでなかったような新しい要素が含まれていること
- ④ 地域性：地域社会に根ざした具体的な活動であること
- ⑤ 発展性：一過性のものではなく、継続的であり発展が期待されること
- ⑥ 主体性：依存的な取り組みではなく、主体的な活動であること
- ⑦ 汗のかき具合：お金で解決しようとしていないこと
- ⑧ 緊急性：対象とする課題の解決の緊急性が高いこと

⑨ 共創志向：他の団体や組織などとの連携が考えられていること

⑩ 支援の必要性：支援することが実現の不可欠な要素であること

## ■調査研究支援関係



### 【選考基準】

選考に当たっては次の基準により評価したが、テーマの重要性やメッセージ性、また今回の活動支援関係の応募内容なども踏まえて総合的に判断した。

- ① 社会性：本プログラムで定義するコミュニティケアの理念に沿っていること
- ② 普遍性：一部の人だけではなく、広く社会に役立つ成果が期待できること
- ③ 実証性：実際に現場（実態）との触れ合いが重視されていること
- ④ 独自性：他のところでもやっているような内容ではなく、独自性が強いこと
- ⑤ 現実性：調査研究の体制と計画がしっかりとしていること

### (5) 選考委員

予備選考に昨年度の支援先団体の有志が自発的に参加してくれたのが特長です。

## ■予備選考員

- 昨年度資金助成先の団体からの有志選考委員 6人  
協力してくださったのは次の6団体です。  
みやざき子ども文化センター  
サービス&アドボカシー森の番人  
さいたま市大宮地区学童保育連絡協議会  
全国マイケアプラン・ネットワーク  
介護者サポートネットワークセンター・アラジン  
わたげの会
- コムケア応援団 4人  
那須直樹（地域福祉研究者）  
西村美和（学校法人職員）  
小山美代（公立研究所研究員）

佐々木理代（NPO支援組織スタッフ）

○コムケアセンタースタッフ 5人

#### ■選考委員

- 北矢行男 : 多摩大学教授
- 片岡 勝 : 市民バンク代表
- 木原孝久 : わかるふくしネットワーク代表
- 町田洋次 : ソフト化経済センター理事長
- 高橋流里子 : 日本社会事業大学教授
- 松原優佳 : 横浜国立大学講師



#### ■公開最終選考会で投票に参加した人 108人

最終選考対象団体	30
上記以外の応募団体	13
NPO関係者	16
選考委員（出席者のみ）	5
企業関係者	24
行政関係者	3
学生	9
その他	5

\*選考に参加する資格条件

- ①対象となるプロジェクトもしくはその団体に関わっていないこと
- ②事前に対象プロジェクトの申請書を読みこんでおくこと
- ③選考会には最初から最後まで参加すること



### 3. 活動支援プログラム

コムケア仲間（資金助成プログラムに応募した団体やコムケア活動に参加した団体や個人）に対しては、資金助成の対象であるかどうかには関係なく、その活動に対しては原則として何でも相談にのっています。相談内容は多岐にわたりますが、内容によっては各分野の専門家や企業、病院などの協力も得て、対応するようにしています。

#### ■申請プロジェクトに関するアドバイス活動

資金助成プログラムの活動支援関係に応募し最終選考に残らなかった105団体に対して、最終選考に残らなかった理由と申請内容に関するアドバイスなどを個別に書状で連絡しました。

件数が多かったため、十分なアドバイスにはならないと思

いましたが、相互支援関係のはじまりになればという思いから実施しました。この活動はその後の交流会などでも話題になり、またそれを契機に交流がはじまるなど、コムケア活動の理念や姿勢を理解してもらう効果がありました。

さらに、このアドバイスを参考にして、他の資金助成プログラムに応募して、資金を獲得したという報告もありました。

#### ■資金助成団体との個別意見交換

資金助成団体に関しては、必要に応じて連絡を取りながら、支援活動を検討しましたが、それぞれの事情もあるために、昨年同様、十分な対応ができませんでした。この活動を充実させるために、各団体からの定期的な活動報告をお願いするようになりましたが、なかなか報告は出てこず、結局は意見交換のレベルを超える事ができず、外部からの能動的な支援活動の難しさを改めて認識しました。

しかし、昨年にも経験したことですが、コムケアセンターのような部外者が訪問することで、活動に刺激を与える効果はあったように思います。人手が手薄な市民活動の場合、プロジェクトの推進に追われて、視野が狭くなってしまいうことも起こりがちですが、コムケアセンターとの意見交換会は、その危険性に気づく契機になれたかもしれません。

また、団体主催のイベントやプロジェクトそのものの場にも、できるだけコムケアセンターのメンバーが参加することにしました。コミュニティケア活動の現場に直接参加させてもらうことで、コムケア活動を深めて行く上での大きな示唆を得ることができました。

#### ■コムケア活動相談日

2002年の6月から、コムケアセンターのオフィスで毎週1回、活動相談日を開催しましたが、これは12月で終了しました。当初は、定期的な相談日を設けることで相談に来やすくなると思ったのですが、相談日という形よりも個別対応のほうが実際のだったようです。

もう一つの発見は、相談日スタイルではなく、メールなどで気軽に相談してもらう仕組みのほうが効果的だということです。メールでの相談は、資金調達から内部のマネジメントの相談まで、さまざまなものがあります。コムケアのメーリングリストでの相談とは違って、かなり突っ込んだ相談もあります。コムケアセンターは、いわば、コムケア仲間のアドバイザーとして機能できればと考えています。

#### ■相互支援関係の構築（ノウハウバンク）

コムケアのホームページを使って、コムケア仲間のノウハウバンクを構築する計画でしたが、実施を見合わせました。市民活動の場合、概括的な相談（相談者自身にも問題の所在が見えていない）と非常に個別の相談（たとえば個別企業の紹介など）に二極分化されがちなため、ノウハウバンクの

項目設定が難しいのと、実際に支援を依頼する時に、どうい  
うルール（無償なのか有償のかも含めて）をつくればいい  
のかなど、解決すべき問題がたくさんあります。ネットワー  
クの実体が育っていない段階でノウハウバンクを公開型でス  
タートさせるのは難しいという判断になり、結局は必要に応  
じて、個々に紹介していくことにしました。

市民活動は、発展につれて似たような問題に直面します。  
今回も相談事のなかに、昨年の団体が同じような問題に直面  
したような事例もありました。そういう場合には、先輩のN  
POに相談に乗ってもらうようにしました。これは双方から  
喜ばれた活動です。まさに「共創型相互支援の輪」の効用を  
実感しました。

こうした活動をできるだけホームページに書きこんで、コ  
ムケアセンターの活動実態を知ってもらおうとしたのです  
が、時間がなくて継続できませんでした。

共創型相互支援の輪づくりは、これからの検討課題です。

### ■コムケアサロンの活用

コムケアサロンもまた、活動支援の場として効果的なこと  
がわかってきました。別項にあるように、今年はコムケア仲  
間に自分たちの活動を発表してもらうスタイルをとりました  
が、発表団体にとっては、いわばコンサルテーションやカウ  
ンセリングを受ける場になり、議論の中からさまざまなヒ  
ントが得られたとの感想ももらいました。

参加者にとっても、有効な情報を獲得できる場に育ちつ  
つあります。

### ■「成功するNPO 失敗するNPO」の出版

第1回目の資金助成団体の全面的な協力を得て、コムケア  
応援団の大川新人さんが「成功するNPO 失敗するNPO」  
（日本地域社会研究所）を出版しました。理論的な書物や事  
例紹介的な書物は多いですが、具体的な事例を踏まえた、実  
践的なテキストはまだ少ないのが現実です。実践者にとつ  
てのテキストを作成したいというのが出版の目的ですが、各  
地の学習会などでも少しずつ活用してもらえるようになって  
います。

NPOの体験は、なかなか社会財産としては蓄積されてい  
かないのが実状ですが、この本を通して、そうした方向への  
第1歩を踏み出せたと思っています。

## 4. 交流支援プログラム

本プログラムの理念にそって、参加団体を中心に、様々な交  
流の仕組みをつくっています。

### ■資金助成プログラムに関連しての交流の仕組み

最終選考会は単に資金先を決定するだけのものではなく、  
そこで他の分野の市民活動がどのような問題意識でどのよ  
うな取り組み方をしているかを学びあう場でもあります。こ  
うしたスタイルに対しては、「忙しいNPOに無駄なエネルギー  
をとらせる」といった批判もありましたが、参加者からは、「全  
国で同じような思いで活動している仲間がいることを知って  
元気づけられた」とか「みんな同じような悩みを持っている  
ことがわかって、またがんばる気力がでてきた」という意見  
もありました。活動内容やプレゼンテーションの仕方なども、  
それぞれ大きな刺激になったものと思われます。

大勢の前での自分たちの活動紹介やプロジェクト説明をし  
たことは初めてという団体がほとんどでしたが、これからの  
市民活動にとっては、外部とのコミュニケーション能力は非  
常に重要です。その意味でも、こうした形での交流体験は有  
効だと考えています。

選考会の後の交流会は特に効果的でした。ここでの出会い  
からその後の活動が広がったケースも少なくありません。た  
とえば、今回、四国から参加された方が2人いましたが（1  
人は発表者）、交流会が契機になって、地元での活動でも支  
えあい関係が生まれたと報告がありました。コムケア仲間の  
活動面での交流も広がっています。

### ■メーリングリスト

電子ネット上でのメーリングリストは参加者が150人を  
超えています。なかなか議論するまでには至っていません。  
まだ「お知らせ」や「呼びかけ」が中心です。公益法人改革  
に伴うNPO法の行方や、ノウハウバンクづくりなどに関し  
ての問題提起も試みましたが、ネット上での議論はまだ難し  
いようです。投稿も一部に限られがちで、現在の段階ではま  
だ、時期尚早かもしれません。

どうしたら効果的な場になるかを、これから実験的に検証  
していきたいと考えています。

### ■コムケアサロン

コムケア仲間やコムケア応援団を中心にして、原則として  
毎月1回、コムケアセンターで自由参加の学びあいの場を  
開催しています。

案内はメーリングリストや、ホームページなどでの呼びか  
けで行っていますが、NPO関係者は忙しいせい、かなか  
参加者がのびません。参加された方からの評価は高いので  
すが、継続実施にはかなりエネルギーが必要です。

将来は日程だけを決めて、自由に集まった人たちのコムケ  
ア論議の場にしたいと思っています。

今年度のサロンは以下の通りです。

第6回 さいたま市大宮地区学童保育連絡協議会（12月4日）

第7回 シティライツ（2月12日）

第8回 キーパーソン21（3月20日）

- 第 9 回 日本ドナー家族クラブ (5月2日)  
第 10 回 コミュニティアート・ふなばし (5月17日)  
第 11 回 アフタースクール (7月17日)

### ■ニュースレター「結びこむ」の発刊

コムケア活動では、オンラインのメーリングリストとオフラインの出会いの場を組み合わせながら、交流の場づくりをしてきましたが、第3の場として、ペーパーベースのニュースレター「結びこむ」を発刊することにしました。これまでの活動から、今の段階ではまだオンラインのネットワーク活動には限界があること、しかしオフラインの場にはなかなか参加できないなどから、それらを補うものとして、大きな意味があると判断しました。

まだ不定期刊ですが、編集などにも積極的にコムケア仲間を巻き込んで、新しい展開をしていきたいと考えています。

### ■ホームページ

ホームページへのアクセスは2003年8月で15000を超えました。まだ募集要項を見るためのアクセスが多いのが実状ですが、なかには内容的なものを読んで、主旨に共感したと言って電話やメールをしてくる人もいます。

本プログラムは基本的に情報を公開していく姿勢をとっているため、選考過程や支援先プロジェクトの動きなどもできるだけホームページに掲載しました。ただ、実際にはホームページのメンテナンスには時間がなかなか割けずいます。

ホームページを持っていないコムケア仲間には、このホームページの一角を使ってもらおう構想もありますが、まだ手付かずです。

### ■コムケア活動首都圏交流会 (2003年2月22日)

コムケア仲間の交流会とコムケア仲間の拡大を目的にして、みなとNPOハウスで交流会を開催しました。50人近い参加がありましたが、全員が輪になって座り、おたがいの顔を見ながら話題を提供しあうという、気楽な会になりました。

さまざまな話題が提出されましたが、公益法人改革に伴うNPO法の問題が参加者から提起されるなど、先駆的な議論もありました。

この会での手応えが、次のコムケアフォーラム2003 in 東京に発展していきました。

### ■コムケアフォーラム2003 in 東京 (2003年6月14日)

昨年はコムケア活動の年度を締めるイベントとして、パネルディスカッションを中心にした公開フォーラムを開催しましたが、今年は交流の側面を強く打ち出すために、バザール型の公開フォーラムというスタイルを創出しました。

最初は100人くらいの規模を予定していましたが、企画

段階で構想はどんどん膨れあがり、200人を超すにぎやかなイベントになりました。

20のコムケア仲間がブース出展し、それに取り囲まれた会場で、NPOをテーマにしたワークショップを開催。終了後はミニイベントが会場の各コーナーで開かれるという、まさにNPOバザールの出現でした。NPOの世界に「楽しさ」や「面白さ」を取り込んだ、これまでとは一味違ったフォーラムが実現できたと思います。地元のCATVが取材し、放映してくれました。

このフォーラムから動き出したプロジェクトも少なくありません。これについては来年の報告書で報告できると思います。

### ■各地でのコムケアフォーラム

コムケアフォーラム2003 in 東京に参加してくれた地方のNPOから、地元でもフォーラムを開催したいという申し入れがいくつかありましたが、そうした動きとも連携する形で、仙台と名古屋でコムケアフォーラムを開催しました。

### ●コムケアフォーラム2003 in 仙台 (7月21日)

仙台のコムケア仲間、「Neo ALEX 学術構想研究院」が中心になって企画準備してくれました。学生やNPO団体、企業の方と様々な人が約40人集まり、朝から夕方まで、参加者全員で意見交換をしました。前半では、「コミュニティ」や「コミュニティケア」についての議論、後半では参加者の事例報告を中心に意見交換しました。

終了後はコーヒーサロンを開催し、「ケアの態様」をテーマに気楽な意見交換をしました。

これまでの交流会やフォーラムとは全く違ったスタイルでしたが、学生が中心になって、新しいコムケアフォーラムの形を創出してくれました。

### ●コムケアフォーラム2003 in 名古屋 (8月6日)

パートナーシップ・サポートセンター(PSC)が名古屋でのコムケアフォーラム2003のホスト役を担ってくれました。名古屋周辺の18のNPOが参加し、それぞれが取り組もうとしているプロジェクトの紹介をしてくれました。参加者は約50人。若い世代の参加が多かったのが印象的でした。終了後、懇親会も行いました。

名古屋のフォーラムもまた、仙台とは違った意味で、これまでない新しいスタイルでした。18の団体から次々と提案されるプロジェクトは、それぞれに魅力的で、早速、参加者から連携の呼びかけがあったりして、これからの展開を期待させるものもありました。

## 5. プログラムへの評価

資金助成団体対象に、期間終了後、活動報告書と共に、このプログラムの内容や運営に関するアンケート調査を行いました。主な意見を紹介します。

### ■ 資金助成プログラムに対する評価

- ・このプログラムは、知人の紹介で知ったが、そうでなければ気づかなかったかもしれない。市や県の支援センターや社協、ボランティアセンターの情報にも掲載してあるといいなと思いました。
- ・広報の際、コムケアの価値観や良さをもっと読み手に伝える方法があったのかもしれない。（この良さの言語化は簡単ではないと思いますが。）同時に思うのが、もっと多くの人がコムケアを知って、広がりがあるってほしい！と思う一方、適正な規模もあるような気もしています。
- ・助成金の申請書は書きやすかったです。事業やプロジェクトを進めて行く上で必要なことを更に整理整頓できました。メールと郵送という受け取り方が驚きました。
- ・資金の使い方に縛りがなく、助成してほしい所に資金が使え、夢のようである。言い換えれば他の助成はありがたかったが窮屈であった。
- ・作る過程を大切にしてくれるプログラムだと感謝している。

### ■ 資金助成以外のプログラムに対する評価

- ・東京が拠点だということを意識せざるを得ない。行きたくても行けない。
- ・現在、企画中のデータベース（情報・人材）バンクなどの利用について早く活用できるものにして欲しい。どの様なものになるか期待しています。
- ・現地ヒアリング、フォーラム開催など、助成と報告のみのプログラムより、NPO支援につながっていると思います。
- ・コムケアサロン、コムケアフォーラムがとても良かったです。万が一、助成金制度が無くなったとしても、この2つは続けていただきたいと思います。
- ・プログラム自体は、もっと方向性を毎回クリアにして、思わず、毎回行きたくてたまらない！というものに、出し方を変えられるかもしれません。
- ・メーリングリストが、連絡報告の多いイメージがあります。もう少し踏み込んだ話し合いがあったほうが、活発になるのかと思います。個別相談も表に出せない問題は別にして、メーリングリストでいろんな方の意見を出し合える形にすると、メーリングリスト自体がノウハウバンクになりえるのではないのでしょうか。

### ■ 公開選考方法に対する評価

- ・「公開」という素晴らしいアイデアにまず驚きと喜びを感じました。今までの助成団体ですと書類選考のみでどんな選考が行なわれているのか、当選しても落選しても不安が残るので、このアイデアは素晴らしいと思います。
- ・とても良い経験になりました。応募者にも票があるというところ、会場に来た人、皆に票があるということが特にうれしかったです。評価する側とされる側、受かる団体と受からない団体、当事者と傍観者、などの垣根をなるべく作らないようにしようという工夫であったかと思います。
- ・関東地域の団体が地の利も良いので応援、ヒアリングに多く来場していた様子でしたが、それらの団体と応援団体の関係性が投票にも影響がないのかどうか公平性の観点から気になりました。
- ・内容（一般受けするものとそうでないもの）とプレゼン能力に左右されないだろうか。
- ・公開選考で決定されること自体は、透明性がある良いと思いますが、候補団体を含め100名近い方が等しく1票を持っているために、主催、事務局の狙い通りに、選考されているか否かを再評価すべきではないかと思います。

### ■ 「大きな福祉」についての意見

- ・とても共感を覚えます。今社会では、福祉というと「小さな福祉」を指していますが、それでは、共生社会はつくりえないと思うからです。本来、あえて福祉などなくても助け合う精神さえあれば、共生していけるものなのではないでしょうか、そうできない社会になったから福祉が必要になった、それは決して狭義のものではなく、全ての人の生活全体だと思います。
- ・とても共感しています。ケア自体が、もともと一方的に施されるものではなく、双方向であると考えています。様々な問題が一部の特別な人たちの特別なものではなくという自覚が、私達自身により求められてくるのだと思います。そのためには、伝える場・知ることのできる場がもっと必要ですし、良い意味での企画力・演出力なども合わせて必要になってくるのだと思います。
- ・「ユニバーサルデザイン」に似ていると思います。「福祉」が自然と、もっと当たり前社会生活の中に溶け込んでいくためにとてもいい理念だと思います。もっともっと適切な言葉があるような気がします…。
- ・ただ助成金を…というだけではなく明確に打ち出している姿勢は素晴らしいと思います。「大きな福祉」という概念はつい日常に追われてしまう各団体にとっても連携・協力を考える時非常に大きな概念であったと思います。

### ■ 「共創型相互支援の輪づくり」についての意見

- ・その通りだと思います。まず顔と顔を合わせる、話してみ

る、出会うことからだと思っています。自分の手や足、目や耳で人とつながることしか社会の大きな問題も変わらないと思っています。

- ・共創型相互支援の為には、各団体の自立度が大きな鍵になってくるのではないかと。健全な依存は、双方が自立した人格を持つ事によって創られるものだと考えています。良くて知らない方の見方の中に、弱者の傷の舐め合いのようなイメージがまだまだ多いように感じています。「大きな福祉」を実現していく為にも、経済的・組織的・精神的自立が欠かせないと考えます。
- ・賛同するが、時間的制約の中で主体的に関われないもどかしさを感じている。

### ■ プログラムに対する提案

- ・公開プレゼンを各地（各県）持ち回りで行なったらどうでしょうか？ 引き受けの土地の支援センターが会場等の準備をする…それが支援の力の向上にも繋がると思います。
- ・活動支援プログラム募集にあたり、申請予定者（申請を迷っている）に対して助成団体の声を届ける場をつくる。（画期的な内容を伝えたい）
- ・少数になるかもしれませんが、2～3年の長期プログラムも選考の中に入れて、活動自体を追っていくと、1年では見えてこない団体の成長のポイントなども見えてくるのではないかと思います。
- ・最終選考会を演奏やマジックや間に軽食時間も入れて、毎年恒例の一大エンターテインメントショーのようなものにしたら楽しいし、市民の関心を惹きつけるのではないかと。

## 6. 資金助成プログラム選考委員講評

予備選考委員の講評はホームページに掲載されています。

### ■片岡勝（市民バンク代表）

今回、私は次の2つのことに貢献する試みか否かを最大の基準にして審査させていただきました。

#### ① NPOによるセイフティーネットの構築

（今回は防犯をテーマにしたものが増えていました）

#### ②社会変革への実験性

（海外での真似ではない、日本での独創性ある活動かで評価しました）

この2点は、これからの時代の社会作りにどうしても必要だが、行政がなかなか対応できていない分野だからです。

私がアメリカで見た1985年のプラザ合意のころの状況に日本が似てきています。社会の崩壊と再生が上手にシフト

できるかどうかの転換点に、今、日本はいるように思います。だから、不安への対処と受け皿が求められるのです。それを肌身で敏感に感じることができるのは生活者である「一人ひとりの人間」です。そして、その問題解決に動き出そうというのも自発性に支えられたNPO活動、コミュニティーセクターなのではないでしょうか。

私が当時、アメリカで見たスラムでの活動は、そういう問題意識から生まれたものでした。例えば、スラムの衛生状態を心配した若者が、そこで起こした洗濯屋NPO活動は目を見張るものがありました。他のコインランドリーよりも安く、だけど、無料ではなくスラム住民に提供された社会サービスは企業の利益至上主義からは生まれなかったでしょう。かなりセキュリティー面でも心配な地域の活動には行政スタッフも二の足を踏んだことでしょう。しかし、ミッションに目を輝かせる若者の姿は、アメリカの将来を担保していたように思います。

コミュニティーケア活動支援センターに寄せられる活動にも私はそれを毎回、感じるのです。時代の雰囲気や敏感に象徴している活動に審査しながら励まされます。

そんな中から選ばれた皆さんの活動に事務局がきめ細かく相談にのるのも、この住友生命の助成の特徴でしょう。ぜひ、この金をだすだけではない新しい助成の仕組みを大いに利用していただきたいものです。そして、更には、申請者同士が交流し協力する、そんな輪を広げて欲しいと思っています。皆さんの活動に期待しています。

今回、残念ながら落選した活動にもずいぶんと素晴らしいものがありました。ぜひ、上記の相談業務やNPO間の交流、協力の輪に加わっていただき、助成はなくとも、こんなに自立的に活動したぞ、という報告を頂きたいものです。

それも期待し、「NPOが次代を作ろう」「地域から日本を変えよう」という私のエールとさせていただきます。

### ■北矢行男（多摩大学教授）

今回、最終選考の大会に初めて参加して、NPOの皆さん一人ひとりの生の表情に接してとても感激した。と同時に、いくつかの疑問も生じた。

まず第一は、このようなオープンな場で各NPOがプレゼンテーションをすることによって、最終審査をすることから生じる問題である。要するに、活動の内実に関するシビアな評価より、見栄えの良いパフォーマンスを好み、審査のウェイトがそちらの方に流されたのではないかとということだ。とりわけ、車椅子でも着れる浴衣の発表は、テレビクルー付きであったから、他の質実剛健風のNPOの発表と対比すると、ルール違反の趣きがあったのではないだろうか。

もう一つの疑問は、どのNPOも、「自分達は、大事な活動をしており、しかし、それはお金がかかることなので、当然補助してもらっていいはずだ」というコンセプトで貫かれ

ていたことだ。確かに、儲かりはしないだろうが、やりようによっては、それなりの収益をあげられる取り組みも数多くあったように思われる。事業を取り巻く様々な要素を有機的、相互補完的に組み合わせ、持続可能な社会問題解決ビジネスに転化させていく可能性を追求する姿勢が今ひとつ希薄に思えたのである。

もう一つの論点は、当日、事務局長が話された寄付に関することである。私は、インターネットとニュートラルなイーバンク銀行のようなインフラが存在している今、あとは、我々の知恵次第だと考えている。イーバンクは互いに口座を持っていれば、手数料なしに送金できる小規模決済専門銀行だから簡単に特定の活動に寄付できる。

例えば、コミュニティ相手に安全で美味しいパンを売っている全国の中小零細パン屋が1万軒組織化され、各お店がイーバンクに口座を設け、そこに融通のきく10万円のお金を預ければ、トータル10億円の資金量をもつ自前の銀行が誕生する。ようするにイーバンクは、NPOの自前の銀行として使いまわすことも可能なインフラなのである。

もはや、銀行が金を貸してくれないなどと泣き言をいうことは許されない。それは我々の知的怠惰を示しているだけだ。コミュニティケアでも、NPOの活動とからめ、イーバンクを活用したファンドレイジングの仕組みをいか組み立てていきかを考えるべきではないだろうか。

### ■木原孝久（わかるふくしネットワーク代表）

時代の要請にマッチした運動というのは、やはりキラキラ輝くものだなと、感心させられます。最近のNPOの動きが、まさにそれです。今まで「ボランティア」という「厳しい縛り」があってなかなか、「もう一步」へ踏み出せなかった活動家たちが、非営利有償という「やわらかい縛り」の中で、思い切り羽ばたき始めました。従来の福祉機関や団体・グループは躊躇していた試みに、NPOたちは果敢に取り組み始めています。申請のあったグループの活動を見ていると、福祉がこれからどっちへ向かっているのかが鮮明にわかってきます。

例えば、少子化対策として求められているベビーシッターに、10代の子どもたちを活用しようという試み。しかもそのコーディネートまでを10代の子たちにやらせようという。10代の性の悩みを同じ10代の子たちが受け止めるための相談室がこのほど宇都宮市内に誕生したという情報もあります。子どもたちの問題は同じ子どもたちが考え、解決に踏み出す。これが新しいトレンドなのでしょう。

子どもたちを地域の様々な社会活動グループへ参加させるという試みも、申請グループにありました。今までなぜ地域グループは子どもを仲間を受け入れなかったのか、不思議でもあります。ソーシャル・インクルージョンという名のもとに、どんな人も地域社会が受け入れていくという旗印を福祉

関係者は華々しく立てておきながら、子どもをその運動の対象に加えていなかったのです。

中古のパソコンを修理してNPO等に提供していくという活動を、障害者の作業所でやろうという試みが、選考会参加者の圧倒的な共感を得ていましたが、このことは、もう福祉は、担い手と受け手を区分けする時代ではなく、むしろ今まで受け手とみなされてきた人たちを担い手にひっくり返すべきだという発想が、広がってきたことを示しています。

福祉の新しいトレンドを体現したような試みが、申請グループの中にまだまだたくさん見受けられたのですが、気になるのはそれがまだ「点」にとどまっているということです。いかにユニークな試みでも、全国に普及しないことには仕方ありません。それを、いかに素早く、効率的にすすめるかが、コムケアを含めて、私たちの大きな課題になってきたと、強く感じました。

### ■高橋流里子（日本社会事業大学教授）

書類選考・公開選考会を通して一般市民が行っている多種多様な領域で活動について知り、一般市民の潜在的力の強さみたいなものを感じました。もちろん、この一般市民とは従来マイノリティグループという扱いを受けていた障害者や高齢者も含めてのことです。

しかし、書類選考では事務局から示された選考基準と首っ引きで採点をしてみたもの大変難しいものでした。申請書類から読み取れることに限界があったため、それらには書類に書かれている以上の活動ができるのではないかと、逆に書類どおりに活動できるのだろうかという思いにかられてしまうものなどがあったからです。書類選考が適正であったかは今でも気になっております。

それでも限られた選考書類の中でコムケアがめざす理念を持つ団体・組織が見られたことに心強さを感じました。既成団体・組織では思いもつかない発想で主体性、自律性、自由に活動できるNPO法人等による市民活動の実態が見え、これらの集合体が社会を創っていくのだという実感です。

一方、気になることもありました。それは組織運営が内実を伴う、理念に向かっているのだろうかということということです。私は市民活動のよさは自由度の高さとクリエイティブティだと考えています。また、「共創」を「共」にクリエイティブな活動で社会を「創る」ものとも理解したい。すると、組織の構成員の対等性や大切さをいかに活動に反映するかが重要になると思うのです。

NPO等の市民活動には多様な人が集まり構成するよさを組織が使いこなし、「共」に「創る」ことが実現できるかという危惧です。個より集団を優先する社会、タテ社会に生き、慣れているという弱点が我々にはあるからです。個々人の意見を本当に大切にできる行動様式をもっているのでしょうか。

このような弱点により活動のプロセスで根拠なく同質の集団に引きずられ、異質な個人の意見を排除する可能性があります。村落共同体の排除の論理や障害者を異質な集団として社会が排除していたと同じことが、一見活発に見える市民活動で起こりうる、いや起きているかもしれません。

NPO法人の増加、そしてその自由度の高さゆえに潜む危険性を感じました。だからこそ市民活動がその過程で「共」の質を問い、「創」のプロセスに注意を払うことが社会の方向性を決めてしまうのであると感じながら選考を進めていました。

### ■町田洋次（ソフト化経済センター理事長）

とびきりよいプランがあった。二つ例示する。

一つは、車椅子の人の「ゆかた」の開発である。山口大学の女学生が自宅の階段から落ち脊椎を痛め車椅子生活になった。彼女はなんとしてもゆかたが着たかったので、車椅子用のそれを開発し、同様な境遇の人たちにこれを広めるためにNPO活動を開始した。

この話、行政サイドからは贅沢となり、きっと前には進まない。NPOでなくては出来ない話で、NPO活用のよい話である。この事業プラン、京都の知り合いの着物の老舗の社長に話した。この社長は自分でもボランティア活動をやっているの、感想を聞きたいと思ったのだが、「洋服はきれを縦に着るもの、和服は横に体に巻くもので、車椅子の人がゆかたを着るのは自然で合っている。私がやるべき仕事だった。しまった！」と話していた。私は、あなたにはこの発想がなかった、NPOに負けたのですねとちょっと皮肉を言い、激励したのである。

二つ目の事例は、目が見えない人が映画を見る事業である。妹さんの目が悪い、しかし彼女は映画が見たいと言うので、大学生のお姉さんが考え詰め、映画には会話とバックに流れる音楽があるので、後は場面毎の風景を言葉で語ってやればよいと気づき、「マーガレットはテーブルから階段の方へ進み、階段の下の方に座り、ジョーンをじっと見つめた」など、画面の様子を録音し、テープにしてそれを映画館に持ち込み、映画を観賞するシステムを開発した。

このシステムを広げるのがNPOの使命であるが、これなど世界中の目が見えない人に福音となるであろう。

以上、使命は具体的、かつNPOでなくては出来ない事業プランになっていた。私はこういう人を見ると、「ああ、彼女は未来を創っているな」と感動する。こういうのがNPOの得意芸、NPOをやるならこのくらいのことを目指して欲しい。

### ■松原優佳（横浜国立大学講師）

今回、初めて選考委員を務めさせていただきました。選考過程を経て、二つほど提案したいことがありますので、講評

にかえて記したいと思います。

まず、今回申請された方へ。皆さんの申請書を読み、公開審査でプレゼンテーションを拝見して、「これは素晴らしい、ぜひ実現してほしい！これがうまくいけば、一箇所だけにとどめておくのは、もったいない」と思う案件がいくつもありました。そこでぜひ、申請なされたプログラムについて、どうやって成功させたのか、どうしたらもっと成功するのか、そのノウハウを、思いを同じくする、全国の仲間たちに広げていただきたいと思います。

その方法として、もちろん、コムケアの交流会や報告会、ネットワークの利用が挙げられます。そのときに、自分たちのノウハウを伝えることを意識して、情報発信をしてください。

そのような場で効果的に伝えるために、またそこに参加できない人にも広げられるように、さらにコムケアのネットワーク以外の人にも広げるためには、話すだけでなく、伝えるツールが必要です。

たとえば助成期間終了後に提出する活動報告書だけでなく、活動の結果のほかに、

- ①作業工程、つまりどうやって作業を進めたのか(スケジュール、担当者の人数・ポジション・スキル、作業の内容など)、
- ②自分たちの活動の振り返り（うまくいった点とその理由、うまくいかなかった点とその原因・改善点）

これら二つの記録を加えたレポートがあれば、皆さんのプログラムを知って「これはいいプログラムだ」と思う人が真似しやすいと思いませんか？このレポートは、きっと皆さんの活動の、次のステップにも役立つことと思います。

それからもうひとつは、選考方法についてです。

書類審査では、10項目の評価基準がありました。この基準の選定に、選考委員も参画させていただけると、どんな視点で審査すればよいか、理解が深まり、一層、コムケアに込められている思いに適った審査ができるように思います。それから、今回は各項目一律5点の配点でしたが、項目によっては10点のものがあってもいいかもしれません。

今回は、選考委員として、コムケアのプログラムに関わりましたが、私も皆さんと同じく、活動者の一人です。ぜひ今後とも、皆さんとつながりを持っていければと思っています。

みなさんのプレゼンを見て、「ずいぶんプレゼンのスキルが高く、しっかりしているな」と思っていたら、前日にかなりアドバイスをなされたそうですね。これで、申請団体の方々は、プレゼンのコツも習得でき、このような「申請するだけでも、メリットがある助成金」は、他になかなか類を見ないでしょうね。

## 7. 応募団体一覧

### 〈活動支援部門〉

NO	活動支援部門応募団体名	プロジェクト名
1	とら太の会	とら太の家建設又はトイレ増築
2	NPO 法人 彩星学舎	学習障害児などの社会自立調理実習
3	養神館合気道龍	子どものための合気道護身教本作製
4	あびこ・シニア・ライフ・ネット	地域シニア間 PC ネットワーク
5	NPO 法人 ネットワーク大府	デイサービス
6	コミュニティ・ケア・ネットいずみ	コミュニティ・クリエイティブサポート事業 ～地域社会の資源の創造
7	NPO 法人 ノウハウ会	「楽しい環境家計簿」普及プロジェクト
8	NPO 法人 まちアート夢虫	演劇体験ワークショップ（平田オリザ氏による）
9	自転車すいすい	「自転車マップ」の作製
10	こだいら水と緑の会	水車の復元により用水路をコミュニティの場に！
11	社会福祉法人 青丘社	ネットワーク型高齢者、障害者作業室の立ち上げ
12	NPO 法人 ひなたぼっこ	在宅障害者（児）の居心地のよい、いくつかの溜まり場（ミニデイ）づくり計画
13	NPO 法人 ハーモニーきょうと	「御蔵山商店街に『居場所』をつくる」プロジェクト
14	NPO 法人 イー・エルダー	障害者施設による中古 PC 再生・モデル作業所作り
15	NPO 法人 PRP きょうと	まちなか居場所プロジェクト「ア・デ・アル・ディスカバリー」
16	めぐるチャイルドラインを進める市民の会	チャイルドライン（子ども専用電話）の実施
17	みなとネット21	2つのNPOのコラボレーション～脱施設化した精神障害者の社会復帰の促進
18	龍ヶ崎コミュニケーションハウス（住民ネットワーク21）	市民の手による花植え運動
19	なずな工房設立準備会	手作りパンでやさしい街づくり
20	NPO 法人 建設工学協議会	ネットワーク型建設受発注方式の形成プロジェクト
21	日本ドナー家族クラブ	ドナーファミリー・キルト活動
22	NPO 法人 西宮地域たすけあいネットワーク	介護者のための「情報べんり帳」作製事業
23	NPO 法人 バリアフリーミュージックガーデン	みんなで作ろう！！バリアフリーコンサート
24	バリアフリーゆかた Project Since 2001	服飾における障害者の自立プロジェクト
25	神戸ポリオネットワーク	障害者の生活の質を高める便利帳作成
26	NPO 法人 多摩六都ブレイス	世代を超えたコミュニティ構築プロジェクト
27	あすなる福祉市民の会	科学的根拠に基づく寝たきり防止と脳の活性化事業
28	STS（松本地域の精神保健福祉を考える会生活支援部門）	生活支援のための協働参画型ふれあい喫茶店の設立
29	音楽ボランティア にこにこアンサンブル	より多くの人に、生の音を楽しんでもらうために
30	NPO 法人 フリースクールまいまい	フリースクールにプレイバックシアターのスキルを取り入れる
31	ますみ会（老人のたまり場いこいの家ふれあいサロン）	老人のふれあいサロン
32	新米ママ応援隊	新米ママ子育て支援・脱密室育児プロジェクト
33	JOINT（ジョイント）	車いすホイールカバーデザインマーケット
34	狭山市の高齢社会を考える会	若葉台『ケアセンター』の開設
35	子育て支援 ふれあい・ねっと	託児ボランティアグループ育成支援
36	NPO 法人 チャレンジネットワークみやぎ	知的障害者のための 学びと交流の道場「ひるば」の運営
37	NPO 法人 コミュニケーション・スカイ21	ピボ・ユニバーサルミニ箱根駅伝競走大会
38	共用品研究会・関西	共用品使用テストモニター組織づくり
39	NPO 法人 がてんねっとわーく	精神障害者・痴呆高齢者の社会参加支援
40	NPO 法人 よこすかパートナーシップサポーターズ	すかセミプロジェクト
41	学術 NGO・PLAOS	グレートボックスを媒介にしたコミュニティケア活動
42	NPO 法人 ほっとステーション	外国人・若者と共に、コミュニティ（ワンコイン）・レストラン実験的事業
43	大枝協 自助具の部屋	提供済自助具の生活現場での使用実態調査
44	Wonder Art Production	体験型環境教育活動 森のアト海のゲイジユツ
45	タイムズバンク実行委員会	タイムズバンク日本全国普及プロジェクト
46	出雲座	失われし心へ
47	みなとネット21	2つのNPOのコラボレーション
48	NPO法人 高知県介護の会	子どもから高齢者、障害者による交流及び、伝統行事の継承
49	げんき松島研究所	プリコラージュなコミュニティづくり
50	ICチャンバラ協会	ICチャンバラシステム全国普及事業
51	福井県子どもNPOセンター	10代のファミリーサポーター養成プロジェクト
52	NPO 法人 AID-Center	和光市認可保育所設立基金の為にチャリティコンサート
53	アスペ・エルデ親の会 三河支部	親と教師・保育士のための軽度発達障害セミナー
54	NPO 法人 功誠会	モータースポーツを通じた生きがい支援プロジェクト
55	NPO 法人 コミュニティ支援センター	新しいスタイルの働く女性の支援活動
56	NPO 法人 国際比較文化研究所	多文化交流 in ぐんま 2003
57	NPO 法人 湘南ふくしネットワークオブズマ	権利擁護についての市民セミナー

NO	活動支援部門応募団体名	プロジェクト名
58	ケアブレイス はなでんしゃ	いやしの広場の実施
59	アタ-スクール 障害を持つ中高生の放課後を豊かにする会	障害を持つ中高年のための音楽療法の会
60	NPO 法人 「花の会」	園芸用有機肥料の寄贈・ご紹介
61	ティ・ライツ(バリアフリー映画鑑賞推進団体)	映画館における同行鑑賞会開催の環境改善
62	NPO 法人 女のスペース・ながおか	あなたのための代弁擁護支援
63	エコシティ 志木	新しい「おせっかいおばさん&おじさん」
64	NPO 法人 キーパーソン21	「教えてキーパーソン！」
65	風のうた 星の旋律コンサート実行委員会	風のうた 星の旋律コンサート
66	NPO 法人 めだかふぁみりい	本人(障害のある人)主体による余暇活動
67	NPO 法人 ふれあい イン さるま	フラダンス in サロマ湖
68	NPO 法人 笑顔	ユウタツの高齢化に対応した『住民による地域コミュニティの再生』
69	NPO 法人 エバーグリーン生活者ネットワーク	自分の親と行く「UD ツーリズム」
70	精神保健福祉を考える市民の会 新潟温もりの会	生活支援センター設立・運営
71	悲しみサポートネット JAPAN	悲しみサポートネット JAPAN
72	NPO 法人 工芸技能研究所	発達障害児の工芸教育活動及び発達障害者の工芸活動支援の成果発表
73	NPO 法人 うえるかむ	「自立生活サポートセンター・みらい」普及啓発事業
74	声を聴きあう患者達&ネットワーク	乳がんと共に生きる人たちの相互支援活動・交流の場作り
75	NPO 法人 にっち倶楽部	にっちサロン 集えば元気
76	砧・多摩川あそび村	子ども達が多摩川で安心して安全に遊べる環境づくり
77	おんなの目で大阪の街を創る会	大阪市民のオアシスは Zoo っとここ！
78	NPO カドリーベア・デン・イン・ジャパン	事件被害者へのペアギフティング
79	NPO 法人 三つのいくじの会	育児・育自・育地「共に語ろう 三つのいくじの集い」
80	NPO 法人 フェミニストサポートセンター・東海	ドメスティックバイオレンス研修ビデオの作成
81	親と子どもどりの杜合唱団	地域の子どもと大人で取り組むミュージカル「サラサとルルジ」の創作・初演
82	地域生活支援センター	ささえあえる環境の中で自らが生活する環境を選ぶ町づくり
83	のじれん	一般市民層への野宿者実像の広報と福祉教育、そして出会い
84	NPO 芸術資源開発機構 (ARDA)	「アート・デリバリー講座」介護者の為のアート・ワークショップ
85	NPO 法人 NPO 佐倉こどもステーション	こどもステーション ミュージカルプロジェクト
86	NPO 法人 キープラネット	子どもへの経済教育と女性の社会参加支援活動
87	筑紫野市地域福祉勉強会	ハンディキャップ負担軽減プロジェクト
88	NPO マスク	健康で安全、リッチな本物の消費生活のありかたの探求と啓発事業
89	NPO だんだんの樹	自己回復の推進
90	ウォーター&ダイビング活用研究所	市民参加による「湘南・海の生き物調査会」
91	子どもの会	引きこもり者のためのミニ社会作り事業
92	NPO 法人 ETIC.	キャリアステップに悩む若者や若年失業者を対象とした、キャリアデザインセミナー事業
93	東北 HIV コミュニケーションズ	エイズ教育プログラム作成プロジェクト
94	黒川こころの応援団	買い物代行事業
95	クラブマーズ	冊子・大和市医療マップ作成プロジェクト
96	キッズドリーム研究会	子供達の発案による子供達のためのプレイミュージアム創り
97	町のオアシス	やすらぎ・いきいきプロジェクト
98	音のボランティアグループ 花音	心と心をつなぐ、音のプレゼントづくり
99	情報ボランティアみやざき	ゆうあいパソコン教室を核としたコミュニティづくり支援
100	NPO 法人 茨城 NPO センター・コモンズ	自分たちの「地域福祉計画」をみんなでつくろう！
101	地域通貨・セタガヤプロジェクト	セタガヤ「点線」ネットワーク普及プロジェクト
102	遊友広場 たまてぼこ	逆瀬台より発信！住民&地域交流の広場づくり
103	長野県社会福祉会権利擁護センターぱあとなあながの	青年後見制度普及啓発・相談事業
104	マザーズフルドくらぶ	子育て支援啓発事業及びフルドの研修
105	コウハウジング研究会	住民参加型ワークショップによる賛同者のネットワークの形成
106	ほっとコミュニティえどがわ	暮らしと住まいのデザインワークショップの実施
107	子育て支援ネットあい・あい	広がれ！子育て支援の輪
108	NPO 法人 サークル円	宅幼老所
109	エスク	東京湾ヨットセーリング実習
110	コミュニティアート・ふなばし	まちづくりユースプログラム
111	NPO 法人 熊本すずらん会	熊本市西部地域における高齢者と障害者の健康と生活づくり事業
112	熊本県子ども劇場連絡会	キッズ・アート・スタート事業
113	ディア-1	「バリアフリーコミュニケーション」スキルアップ講座
114	NPO 法人 ユニークフェイス	ユニークフェイス当事者の社会復帰プログラム開発
115	生野第2土曜日あそぼう会	「THE WINDS OF GOD」下関公演
116	湘南メディア・ビレッジプロジェクト	湘南市民テレビ局プロジェクト
117	市民セクターよこはま	障害者と支援者のためのインクルージョン研究会事業
118	NPO 法人 CCCNET	Kids シェルター
119	ひょうご市民活動協議会	資機材共同利用による資源の有効利用促進

NO	活動支援部門応募団体名	プロジェクト名
120	試住空間「エコハウス町家」	異世代交流を促すワークショップ及びイベントの開催
121	NPO 法人 ストローク会	精神障害をもつ人達の自立へのピアサポート事業
122	寿支援者交流会	路上インタビューの発行
123	わいわいネットなかま	わいわいネットなかま回転焼きに挑戦!
124	NPO 法人 シェルター	ホームレス問題解決への市民ワークショップ開催とホームページ開設
125	秋川流域生活支援ネットワーク	地域における福祉力向上事業
126	「山谷」ふるさとまちづくりの会	ホームレス問題の解決と山谷地域の再生を連携させる目標空間イメージ地域への提案
127	手鞠の里	介護者、される側、共に共感し、一人の人間として安心して暮らせる生活
128	ジュビリーセイリングトラスト日本代表部	多くの方に大型帆船の冒険に挑戦していただくために
129	ソーシャルベンチャー・パートナーズ (SVP) 東京ベイ	若手ビジネスパーソンと地域をつなぐ、ソーシャルベンチャー支援 パイロットプロジェクト
130	メリーポピンズの会 (市民園芸ネット)	広域園芸ボランティアフォーラムの開催
131	グループ Forlife 21 (フォーライフ21)	〈ボランティア公開市場〉開設プロジェクト
132	大阪市中途失聴・難聴者協会	中途失聴・難聴者のための手話教室
133	NPO 法人 自然体験活動推進協議会	CONE 指導者の集い 全国の自然体験活動指導者のネットワーク作り
134	クリエイティブ・アート実行委員会	私の町の物語
135	アペハ 日本ペルー共生協会	ラテンアメリカ文化教室

## 〈調査研究支援部門〉

NO	調査研究支援部門応募団体名	テーマ名
1	NPO 法人 まちのよそおいネットワーク	民家再生と周辺景観の研究
2	NPO スタンダードヴィジョン	日本における体臭差別の実態調査および研究
3	野宿者協同組合	野宿者の健康・雇用・家族背景調査
4	サスティナブル・コミュニティ研究会	市民による高齢者のための集住住居の企画
5	NPO 法人建設工学協議会	「まちづくり」を起点としたサスティナブル・コミュニティの構築
6	NPO 法人障害者総合研究所 (申請中)	障害者施設サービス評価プログラム
7	NPO 法人釜ヶ崎支援機構	地域町内会非加入の高齢者世帯に関する地域町内会との協同行動
8	高齢者向け集合住宅に居住する自立高齢者を見守る生活援助員の会	ひとり暮らし高齢者の生活を見守る生活援助員の役割とその意義
9	阿部愛子	障害者と共にあるためのコミュニティケア
10	NPO SANNet 青森	精神障害者の中心商店街における社会参加促進システムの研究
11	日本語学習支援研究会	首都圏における日本語学習支援活動に関する調査研究
12	NPO 法人市民がつくる政策調査会	支援費制度に向けた障害者福祉サービスに関する調査研究
13	中郷文化プラザ・プレイセンター	日本版プレイセンター活動のための子育て中の親子によるフィールドワーク
14	NPO 法人 功誠会	Mission
15	NPO 法人 エコ・カルデアイン生活者ネットワーク	『コミュニティビジネス日米比較調査』
16	社会福祉法人 京都聴覚言語障害者福祉協会 京都聴覚言語障害者の豊かな暮らしを築くネットワーク山城委員会	聴覚言語障害者の社会参加促進に関する実態調査
17	井上 双葉	当事者をつくる都市における単居高齢者の生活ネットワーク
18	女性・市民信用組合設立準備会	ドイツの小規模の非営利・協同組織の金融機関の調査研究
19	ジュビリーセイリングトラスト日本代表部	16歳以上でしたら、障害を持つ方でも、ご高齢の方も大型帆船の冒険を楽しめます。
20	NPO 法人 せたがや福祉サポートセンター	痴呆予防プログラムの実践的検証とその普及方法に関する研究
21	NPO 法人 AID-Center	保育所開設までの保育士の人材育成
22	セルフ・ディフェンス講	「犯罪被害は避けられる」
23	横濱楽座 (9月初旬 NPO 法人化申請予定)	商店街の地域コミュニティセンター化による活性化計画
24	NPO HoHo Community	地域に於いて国際交流活動を促進する為、海外の団体とのネットワークづくりに関する調査
25	路上生活者と共に活動する「山谷」ふるさとまちづくりの会	山谷地域における単身高齢生活保護受給者への居住支援に関する調査研究
27	サークル ミウィ (恒川かおり)	心豊かな活動にとりこむ 100 人の人々
28	手鞠の里	介護者、される側、共に共感し一人の人間として安心して暮らせる生活
29	NPO「黒川こころの応援団」(年内法人化準備中)	心に辛さを抱える者同士・心の支え合い・癒しの場の形成
30	釜ヶ崎居住 COM	野宿生活経験のある生活保護受給者層の居住環境に関する調査
31	みんなで健康と医療を考える会	医療・福祉情報を地域の人々に提供できるシステムづくり
32	全国視覚障害者外出支援連絡会 (JBOS)	視覚障害者に利用しやすい交通機関のあり方
33	人間関係アップロー宮崎さらさら	宮崎における働き盛りの中高年男性ストレス度調査
34	NPO 法人 女のスペース・にいがた	DV 被害者への Will サポートプログラム
35	NPO 法人 家庭的保育事業者ネットワーク	認可外保育施設・保育サービス現場での安全管理対策の現状と意識調査
36	日本子ども NPO センター設立準備委員会	非営利組織の活動評価研究

## 第2部

### 資金助成プロジェクト活動報告

#### 【活動支援】

1. 学習障害児などの社会自立調理実習……………	18
2. 障害者施設による中古PC再生モデル作業所づくり……………	19
3. ドナーファミリー・キルト活動……………	20
4. 服飾における障害者の自立プロジェクト……………	21
5. 生活支援のための協働参画型ふれあい喫茶店の設立……………	22
6. すかっ子セミナープロジェクト……………	23
7. 2つのNPOのコラボレーション……………	24
8. 幡多昔むかし祭……………	25
9. 10代のファミリーサポーター養成プロジェクト……………	26
10. 視覚障害者の映画鑑賞会の環境整備……………	27
11. 教えてキーパーソン！……………	28
12. 乳がんと共に生きる人たちの相互支援活動・交流の場づくり……………	29
13. 大阪市民のオアシスはZooとここ！……………	30
14. ドメスティックバイオレンス研修ビデオの作成……………	31
15. エイズ教育プログラム作成プロジェクト……………	32
16. 心と心をつなぐ、音のプレゼント……………	33
17. 自分たちの「地域福祉計画」をみんなでつくろう！……………	34
18. 異文化マッチング空間「c a f e-3-」プロジェクト……………	35
19. 湘南市民テレビ局プログラム……………	36
20. 若手ビジネスパーソンと地域をつなぐソーシャルベンチャー支援……………	37

#### 【調査研究支援関係】

1. 痴呆予防プログラムの実践的検証とその普及方法に関する研究……………	38
2. 犯罪防止マニュアルの作成……………	39



公開選考会のようす

## ■心をつまずきのある子どもたちの社会自立へ向けての調理実習

### NPO法人 彩星学舎

団体名：NPO法人彩星学舎

代表者：垣花卓信

設立時期：1999年4月1日

目的：子どもたちの健全な発達と自立を実現するために、市民の協働によって、学びのコミュニティの場を創造すること。

所在：埼玉県さいたま市

ホームページ：<http://www5.plala.or.jp/saisei/>

#### ○プロジェクトの目的と概要

「学習障害児や多動傾向、心をつまずきのある児童・生徒の社会自立へ向けての調理実習」に取り組んだ彩星学舎は、子どもたちが自立をするための学びの場を提供するフリースクールである。現在、40人の高校生が通っている。

彩星学舎では、実践的な学習に力を入れており、農作業、調理実習、大工などの授業を行っているが、調理実習は器材不足や食材費の問題から全員が一緒に体験することが難しかった。しかし、調理は、「自分の食べるものを作る」という、まさに自らの生活に直結した手応えのある活動であり、しかも毎日継続して行うことが可能なため、子どもたちの自立を支える活動としての効果は大きい。食材を育てる農作業との連動、支援者である地域の人や学生たちも協働しやすいという面もある。

助成金は主に食材費に充当することにした。子どもたちが間違った食材を買ってきたり、料理に失敗したりして、ロスが発生するため、食材費は予想以上にかかる。そのため、調理実習の回数を増やすことが難しかったが、今回の助成資金により、思い切り調理実習に取り組むことができた。

#### ○活動内容と成果

活動内容は、子どもたちが自分でメニューを考え、材料や調理器材を準備し、共同で、調理することによって、社会性や自立する自信の獲得と生活力の向上をめざすことである。毎日、40人の生徒のうち、10人が交代で40人分の昼食をつくる。調理師をめざす調理スタッフ1人がこの活動を支援している。

活動の成果は5つある。

1つめは、慣れるにしたがって、調理時間が短縮できた点である。当初は2時間半もかかっていた調理時間が、1時間半まで短縮された。回を重ねることによって、作業の流れが見えるようになったことも大きな理由である。

2つめは、子ども同士のコミュニケーションが円滑になった点である。その場で「おいしい」といってもらえると、「ありがとう」と答えることができる。調理をしながら、踏み込んだ話をする機会も増えた。「食」のコミュニケーションパワーは大きい。



3つめは、自発性を引き出した点である。調理スタッフが急病で休んだことがあった。簡単なおにぎりとして1品をつくることにしたが、子どもたちが味噌汁もつくろうと提案し、実行した。これは、画期的なことである。

4つめは、子どもたちの食欲が増した点である。自分たちが農場でつくった無農薬の野菜を調理に使い、しかも自分たちで作ったということが、影響しているのだろう。

5つめは、買い物の仕方が上手になると同時に、家でも食事の手伝いをするようになった点である。

今まで、ひとり暮らしを考えようにも、不安が多すぎて、頭をかかえる子どもが多かった。しかし、買い物をしたり、調理をしたりすることができるようになったので、生活への自信がついてきた。実際、この春から、軽度の発達障害の子どもが、1人暮らしに挑戦しはじめた。これは、大きな成果である。

#### ○これからの展望

このプロジェクトによって、子どもたちにはさまざまな変化が起こってきた。外部への関心も高まった。調理実習はこれからも継続していく計画だ。

彩星学舎ではこれまで、住民との交流といっても、施設内での活動が中心だったが、これからは老人ホームやデイケア施設などへの出前調理のようなことも検討されている。将来は調理キャラバン隊を組織したいというのが、スクールマネージャーの橋本克己さんの夢である。

次の課題は就労支援である。これまでの活動のなかで生活に自信をつけてきた子どもが、進学や就職を考えるようになってきた。すでにおかし屋で実習をしている人もいるが、将来は、彩星学舎の直営店をつくることによって、団体の経済的自立と子どもたちの就労体験の場を確保する計画である。

調理実習から始まる物語はきっとたくさんあるはずだ。子どもたちが自分たちの手で、彩星学舎を自立させ発展させていくのもそう遠いことではなさそうだ。

## ■障害者施設による中古PC再生のモデル作業所づくり

### NPO法人 イー・エルダー

団体名：NPO法人 イー・エルダー

代表者：五月女喜二

設立時期：2000年12月22日

目的：高齢者が社会に支える側に立ち、ITの知識・経験・技術を生かしながら、ITを核とした社会貢献活動をする。

所在：東京都渋谷区

ホームページ：<http://www.e-elder.jp/>

#### ○プロジェクトの目的と概要

イー・エルダーは、高齢者のIT技術を生かして、社会問題を解決することを目的とするNPO法人である。プロジェクト責任者の鈴木さんは、日本IBMで社会貢献部長をしているときにこの団体を立ち上げ、定年退職後、この団体の役員として活動している。

今回のプロジェクトは、「障害者施設による中古PC再生のモデル作業所づくり」。イー・エルダーは発足以来、中古PC寄贈プログラムを実施しているが、そのPC再生事業を、東京都江東区にある障害者授産施設「ゆめ工房」に委託し、モデル作業所になってもらうという取り組みである。イー・エルダー設立当初から鈴木さんが考えていた構想だという。

中古PCの再生作業は簡単な仕事ではない。しっかりした技術と管理体制が必要である。しかし、そうした体制が確立できれば、授産施設などにとっても効果的な事業になるはずだ。今回のプロジェクトでモデルを構築し、そのノウハウを生かして、障害者による中古PC再生事業を全国に広げたいと鈴木さんは考えている。

#### ○活動内容と成果

イー・エルダーは事業型NPOを目指している。今回も、鈴木さんたちの企業体験を踏まえて、事業計画がしっかりとたてられていた。

- ①イー・エルダーが中古PCの提供と再生費用を負担する企業を開拓する。
- ②ゆめ工房の作業指導者が日本IBMリユースセンターで作業技術を習得する。
- ③ゆめ工房は作業環境・作業管理体制等の技術移転を受け、体制を整備する。
- ④ゆめ工房がPC再生作業を実施し、非営利団体へリユースPCとして出荷する。
- ⑤寄贈先団体からの故障やサービスの要求に応じて、適宜解決のためのサービスを行う。
- ⑥寄贈3か月後、寄贈先満足度調査を行い、今後の改善に生かす。

しかし、実際に活動に取り組みだすと、ゆめ工房の作業員の習熟度が思うように上がらない。日本IBMの技術者の



支援を得て改善策を実施したのだが、その過程で中心となる作業員が、がんばりすぎた反動で精神的な落ち込みが激しくなり、作業を離れざるを得なくなってしまうというハプニングも発生した。そのため、ゆめ工房に、健常者の職員2人を採用してもらい、仕事の管理体制を改善し、実態に沿いながら技術や管理を向上させていくことにした。鈴木さんたちスタッフの企業体験が役立ったことは言うまでもない。

最終品質テストの習熟度を上げることも難しい問題だった。経験と勘が必要とされる技能だったが、米国の会社から品質テストプログラムの寄贈を受けることに成功し、品質向上を確保することができた。

こうした努力により、作業員のスキルが上がり、半年で300台の出荷を達成した。しかも3か月後のアンケート調査では、100%の満足評価をもらっている。

#### ○これからの展開

ゆめ工房のモデル作業所づくりが軌道に乗ったので、次の課題は、ほかの作業所にPC再生作業を技術移転することである。すでに徳島県と大阪府の作業所に技術移転することが決まっている。

徳島県では行政を巻き込んだ取り組みが計画されている。徳島県庁から障害者のPC教室を事業委託されている作業所のJCIが新たにPC再生作業に取り組むが、イー・エルダーと徳島県庁がパートナーシップを組んで支援していく。具体的には、県庁がイー・エルダーに、県の中古PCの寄贈と事業委託を行い、イー・エルダーはその再生作業をJCIに再委託する。再生PCはJCIへ寄贈し、それを個人に貸し出す。年間100台規模の事業になる予定である。個人に寄贈しないのは、マイクロソフトとIBMの社会貢献活動方針により、個人には現金やPCを寄贈できないからである。

このような行政も巻き込んだ新しい枠組みを創造しながら、作業所によるPC再生作業の全国展開を目指していく計画である。新しいソーシャルベンチャーに取り組むイー・エルダーの活動は、これからの事業型NPOのひとつのモデルとっていい。

## ■ドナーファミリー・キルト活動のスタート 日本ドナー家族クラブ

団体名：日本ドナー家族クラブ

代表者：間澤洋一

設立時期：2000年9月1日

目的：臓器提供（生命の贈り物）をした家族たちの交流や相互扶助を通じて、臓器移植医療の社会的意義の理解と向上をはかる。

所在：東京都千代田区

ホームページ：<http://www.jdfc.net>

### ○プロジェクトの目的と概要

日本ドナー家族クラブは、臓器提供した家族の互助と臓器提供者とその家族に光を当てる活動をしている団体である。

代表の間澤さんの長女朝子さんは、米国留学中の1997年に交通事故にあった。脳死状態になった朝子さんは、ドナー（臓器提供者）登録をしていたため、米国の6人の患者に臓器提供することになった。そのときの間澤一家の体験がこの活動の原点とあってよい。

日本では、1997年10月に臓器移植法が施行された。1999年2月、はじめての脳死臓器移植が実施されたが、臓器提供者へのマスコミの過度の取材のためプライバシー侵害などの問題が発生した。そこで、ドナー家族の互助組織が必要と考え、間澤さんをはじめとした3家族が发起人になって、この団体を設立した。現在は、50家族が加入している。

今回は「ドナーファミリー・キルト活動のスタート」プロジェクトである。ドナーファミリー・キルトとは、ドナーとなった愛する人への家族の深い思いを20センチ四方の布の中に縫い込めたものだ。米国のドナー家族の団体から始まった活動であり、ドナー家族の思いを多くの人たちに知ってもらいたいという思いが込められている。今回、15家族が参加してキルトが制作された。そのキルトを中心に、社会への情報発信も含めて、「生命・きずなの日」記念祭を開催するのが、今回のプロジェクトである。

### ○活動内容と成果

5月17日の生命・きずなの日（日本ドナー家族クラブが提唱し正式登録された記念日）に、日本移植者協議会はじめ移植患者6団体との共催で、「あなたを忘れない！ 生命・きずなの日フォーラム」を開催した。臓器提供をした人の家族、臓器提供を受けた人とその家族、臓器移植医療の関係者、一般の人を対象に、いま生きていることの喜びを実感するイベントである。趣旨に共感した米国のドナー家族も参加してくれた。

全国紙3紙に案内が載ったため、300人もの人々が参加した。米国のドナー家族が制作したキルトや臓器提供を受けた人（レシピエント）がつくったキルトも展示した。これまで臓器提供者の家族と提供を受けた人が交流することはほとんど



どなかったが、そうした当事者同士が、感謝の声をかけあって、抱き合うことができたのは、画期的なことだった。両者が、一堂に会するイベントは世界的にも珍しいという。

イベントの様子は、新聞やテレビでも紹介されて、反響を呼んだ。参加者からも、感動したという声が多数寄せられた。はじめてのイベントとしては大成功であり、これからの活動に大きな一歩をしるすことができた。ドナー家族の思いを社会に伝えていく上でも、大きな成果があった。

### ○これからの展望

移植医療では、どうしても臓器移植を受けた人が注目されがちだが、臓器を提供する人がいなければ移植医療は成立しない。臓器提供者やその家族にももっと目を向けるべきである。日本ではまだドナー家族への目は冷たい。日本の臓器提供者が少ないのは、臓器提供者やその家族への理解や心のケアが遅れているからではないか。

間澤さんたちの活動の目的もそこにある。臓器提供者やその家族が、「命の贈り物」をした勇気ある人やその家族であることをもっと社会に知ってもらいたい。ドナー家族がそうした自信や誇りを持てるような社会にしていきたい。そして、いのちや絆がもっと大切にされる社会を実現したい。それが間澤さんたちの思いである。そのためには、この問題を社会化していくことが不可欠である。

間澤さんたちの思いは一歩前進した。しかしもっと多くの人たちにこの問題を知ってもらい、考えてもらいたい。間澤さんは、依頼があれば、臓器移植者のイベントや臓器医療関係などの講演会に積極的に出かけて行って、生命の大切さを訴えつづけている。

来年の生命・きずなの日にもイベントを開催したいと考えている。こうしたイベントの中から、ぜひ新しい物語を育ててほしい。

## ■服飾における障害者の自立プロジェクト バリアフリーゆかたプロジェクト

団体名：バリアフリーゆかたプロジェクト

代表者：石川ミカ

設立時期：2001年4月1日

目的：車いすに乗ったまま着られる“バリアフリーゆかた”づくりの活動から、着やすい服づくりとそれを着てまちにでていくことを自分たちで実現していく。

所在：山口県山口市

ホームページ：http://www.geocities.co.jp/Stylish/3791/top.htm



### ○プロジェクトの目的と概要

バリアフリーゆかたプロジェクトは、車いすに乗ったまま浴衣を着て、夏祭りに参加したいという石川ミカさんの思いからスタートしたプロジェクトだ。

石川さんは25歳の時に事故で車いす生活になってしまった。車いすではなかなかお洒落が楽しめない。特に毎年、夏になると浴衣を着たいと思うのだが、バリアが多すぎる。同じ思いの人がたくさんいるだろう。そこで、同じ障害を持つ夫と服飾デザインを学んでいる夫の友人に協力してもらって立ち上げたのが、この団体である。石川さんが事務局を引き受けた。

以来、浴衣の試作や服のバリアフリー化に取り組んできた。

たとえば浴衣にしても、着やすさという機能重視で、デザインやお洒落感覚は手つかずだったが、洋裁や和裁の知識を持つメンバーがボランティアで参加してくれ、プロジェクトも広がってきた。そして、浴衣を楽しむ環境づくりの大切もわかってきた。そこで、この活動を通して、もっと障害者の社会参加の可能性を広げていきたいと考え、今回は「自立」をテーマに活動を一步進めることにした。



障害者たちが中心になってこうした活動が各地で広がるのが、ノーマライゼーション社会の実現につながっていくと石川さんは考えている。

### ○活動内容と成果

活動当初は、「みんなが着られる服づくり」を目指していたが、活動を進めていくうちに、「みんなが着られる服」は「着たい服」ではないことがわかってきた。そして、「みんな好きな服を着ているのか?」「自分で選んでいるのか?」といった疑問が出てきた。「好きな服を選ぶ自由、環境が大切だよね!」ということで、まずは障害者(高齢者を含む)に好きな服を選んでもらう。そして、その服を着るためにはどういう工夫が必要かを考え、その実現に取り組むことにした。できることから少しずつ、が、活動の方針になった。

現在、主婦(子ども連れを含む)が中心の縫製活動と学

生や社会人を中心としたプロジェクト企画運営活動をそれぞれ月に2回ずつ行っている。市民がたくさんのミシンを提供してくれたが、その修理を地元のミシン業者が無償で引き受けてくれるなど、企業の応援も増えてきた。こうした相互支援の輪が広がることは石川さんたちにとっても、大きな発見だった。行動を起こせば、社会は動き出す。

浴衣は象徴的なもので、活動は浴衣に限ってはいない。それも服だけではなく、生活全般へと関心は広がってきた。そして次第に、みんなが住みやすいまちづくりへと向いていった。障害者のことだけを考えていては限界がある。さまざまな人たちを巻き込んで、一緒に考え行動していくことが大切である。

そういう思いで、このプロジェクトの情報発信には力を入れてきた。そのおかげでテレビや新聞などでも活動が紹介されるようになり、外部からの問い合わせも増えてきた。山口市の社会福祉協議会や市民活動支援センターなどからも取材を受けるようになった。

### ○これからの展望

障害者の浴衣づくり、といった限られたテーマからスタートしたにもかかわらず、活動はまちづくりへと広がってきた。そうになったのは、さまざまな人たちが参加してくれたからである。参加者を広げていくことは活動を進化させる。学生たちを中心に障害者の暮らしを体験してもらうイベント「目線100」も開催した。街に出て行って活動したことで、市民たちの理解も広げることができた。

市民活動を継続していくためには、組織としての経済基盤も整えていかねばならない。障害者のための服づくりのノウハウが蓄積されれば、企業との連携による事業化も夢ではない。これまでの活動で蓄積されたノウハウやネットワークをどう活かしていくかが、自立に向けてのこれからの課題である。

石川さんがこの活動から学んだことはたくさんある。それがまた、次の活動の起爆剤になっていくだろう。どう発展していくか楽しみである。

## ■生活支援のための協働参画型ふれあい喫茶店の設立 STS（NPO法人松本地域の精神福祉を考える会／生活支援部門）

団体名：STS（NPO法人松本地域の精神福祉を考える会／生活支援部門）

代表者：桑原美由紀

設立時期：2002年6月20日

目的：松本地域の精神保健福祉の向上を目指し、健全な精神保健福祉を実現する生活支援体制の実践開発を行う。

所在：長野県松本市

### ○プロジェクトの目的と概要

松本地域の精神保健福祉を考える会は、その名の通り、長野県松本地域の精神保健福祉の向上を目指して活動しているグループである。専門家による施設中心の生活支援と市民による地域中心の生活支援を、行政、民間団体、家族、当事者が一体となって総合化し、自律的な生活支援体制を構築しようという、独自の「松本方式」を提唱している。

桑原美由紀さんは、その会員として活動していたが、みんなが気楽に集える憩いの場がほしいという声が強まったのを受けて、新たにつくったのが、STS（生活支援部門）である。そこが中心になって、今回は「生活支援のための協働参画型ふれあい喫茶店の設立」に取り組むことになった。

単なる交流の場ではなく、地域による生活支援の実践開発の場にしていくのが目標だが、障害者や家族が中心になって喫茶店を運営していくことで、地域における就労の場づくりにも刺激を与えたいと桑原さんは考えている。

こうした場ができれば、松本地域の精神保健福祉を考える会そのものの活動もやりやすくなる。活動そのものを実践的な方向へ大きく発展させる契機にもなるだろう。

### ○活動内容と成果

期待は大きいですが、実際の展開となるとそう簡単なことではない。桑原さんたちは計画当初から喫茶店の名前を決めていた。「てくてく」である。「歩く速度で暮らしたい」というのが、そこに込められた意味だが、それは同時にこのプロジェクトの展開の速度でもある。急ぎすぎではうまくいかないことを、桑原さんはよく知っていた。

「てくてく」の開設場所は桑原さんの自宅の1階を予定している。リフォーム費用の大半は桑原さんが立て替えることにしたが、コムケア資金もその一部に活用された。必要な備品什器などは極力、リサイクル店を活用し、リフォーム作業もできるだけ自分たちで取り組むことにした。

まず取り組んだのが、家族や当事者、ボランティアとの交流会である。メンバーで十分に話し合ってきたつもりだったが、実際に動き出すとメンバー間の微妙な意識の違いが見えてきて、夢を語る段階と現実段階との違いを知らされることもあった。自分たちで喫茶店をつくるには、それなりの努力が必要だが、生活保護や障害者年金を生活基盤に置きたいので疲れてまでは作業はしたくないという思いも強く、みんな



なで汗して作り上げていくということはそう簡単ではなかった。

そこで、最初の計画にこだわることなく、ともかくそれぞれが自分を素直に出し合うことを優先することにした。そして、予定している場所の階上の部屋を使って、憩いのスペース「てくてく」をスタートさせ、週3回、コーヒーを飲んだり、ミーティングしたりしながら、その合間に1階の喫茶店づくりの作業を行うようにした。平均して、毎日4～5人の人が集まっている。

### ○これからの展望

できるところから無理せずにゆっくりやっていきたいというのがメンバーの気持ちである。当面は「てくてく」で話し合いながら、喫茶店づくりの作業にも取り組んでいく予定だ。時間はかかるだろうが、その分、いいものが生まれるだろう。ただ場所ができれば良い訳ではなく、その場所を自分たちのものと思って、活かしていく人のつながりが育たなければ、喫茶店も生きてこない。

喫茶店がオープンしたら、そこを精神障害者たちの就労支援センターにしていく計画である。調理、接客、清掃、会計、実習機会はいくらでもある。食材の調達を通して、ネットワークを広げて行くことで、新しい可能性も開けてくるだろう。そうしたことを通じて、ぜひとも利益をあげて、協働メンバーに還元し、みんなが経済的に自立できるようにしていきたい。

桑原さんが構想している協働喫茶店の実現にはもう少し時間がかかるだろうが、「てくてく」から新しい物語が生まれる日もそう遠くはない。精神保健福祉の松本方式の具現化に向けた桑原さんたちの活動に注目したい。

## ■すかっ子セミナープロジェクト

### NPO法人 よこすかパートナーシップサポーターズ (YPS)

団体名：NPO法人 よこすかパートナーシップサポーターズ (YPS)

代表者：藤澤浩子

設立時期：2001年10月2日

目的：「市民が主役」の社会の実現を目指して、市民の立場から市民協働によるまちづくりを考え、実践し、市民による自発的で公益的な非営利活動を支援すること。

所在：神奈川県横須賀市

ホームページ：<http://www.geocities.co.jp/HeartLand-Yurinoki/3005/>



#### ○プロジェクトの目的と概要

よこすかパートナーシップサポーターズ (YPS) は、横須賀市の市民活動団体を支援するNPO法人である。代表の藤澤さんは、以前、横須賀市立市民活動サポートセンターの職員だった。2001年に、このセンターの運営がNPO法人に委託されることになった。そこで、応募してみようという思いを持った仲間が集まって設立したのがYPSである。残念ながらセンターの運営は受託できなかったが、YPSはその後も、市民協働のまちづくり活動に取り組んでいる。

今回のプロジェクトは、小中学生を対象とした子ども体験プログラム「すかっ子セミナー」である。週5日制になって週末の余暇が増えた子どもたちに、地域のボランティアグループや市民団体の活動を体験する機会を提供し、身近な自然環境や地域社会に対する理解を深めてもらい、将来の地域人材を育てていこうというのが目的である。同時に、そうした活動を通して、さまざまな分野で活動しているNPO同士、あるいは市民団体と行政の間に新しいつながりを育てていくことも目指している。2002年にパイロット事業として試行したが、その成果を踏まえて2003年度に本格的な展開に取り組むことになった。

具体的には、市内で活動している市民団体に呼びかけて実行委員会を組織し、テーマ別にコースを設定し、セミナーを展開していく。いずれも、子ども主体のプログラムである点に特長がある。

#### ○活動内容と成果

さまざまな団体への呼びかけの結果、19団体の参加が得られた。参加団体が多様なほどプロジェクトは豊かになるが、意見の調整は難しくなってくる。そこで、参加19団体による、プランニングのためのワークショップを4回実施し、プロジェクト全体の目的を確認し、具体的な内容をじっくりとつめていった。こうした活動からYPSもさまざまなことを学ぶことができた。これからの市民活動には、開かれたネッ

トワーク志向が大切である。

4月に市内小中学生を対象に参加者の募集を行った。同時に、横須賀と周辺地域の高校や大学に呼びかけ学生ボランティアを募集した。参加者は予想よりも少なかったが、新聞などで話題にしてもらい、セミナーへの関心は高まってきている。

セミナーの実施期間は2003年5月から11月までで、11月に合同発表会を開催する予定である。5月の全体オリエンテーションを皮切りに、セミナーは開始された。フィールドワークもあれば、古典を楽しむコースもあり、内容は実に多様である。多くの市民団体が参加しているからこそ、そうした幅広さが可能になっている。

#### ○これからの展開

今回の反省点は、思うように参加者が集まらなかった点だという。その理由の一つは、子どもたちのニーズ調査をしなかった点である。市民団体の視点でコースが設定されたが、大人の評判がよくても、子どもの評判がよくないコースもあった。たとえば、「ゴミ・リサイクル探検」や古典を学ぶコースである。

一方、定員をオーバーしたのが、福祉系「出会い・ふれあい」や自然系「水と生きものたち」。子どもたちの視点で、コース名や内容を工夫していくことが必要だろう。

YPSは、これからも毎年、このセミナーを開催していく計画だ。継続していくことで、参加者も口コミで増えていくだろうし、主催団体の交流も深まり、セミナーの内容も進化していくはずだ。そして、このプログラムを継続受講する卒業生が、高校生や大学生になって、まちづくりのリーダーとして活躍してくれたらいいと藤澤さんは願っている。

しかし問題がないわけではない。こうした活動を継続していくためには、人材と資金がどうしても必要になってくる。できれば有償の事務局スタッフもほしいが、今のところその目処はついていない。YPSが組織として自立していくためにも、人材と資金の問題は避けて通れない。このプロジェクトをどう発展させていくか、これからの活動に期待したい。



## ■ 2つのNPOのコラボレーション—精神障害者の社会参加の促進にむけて みなとネット21

団体名 みなとネット21

代表者 村上雅昭

設立時期 1998年4月1日

目的 地域ケアによる包括的なケースマネジメントによって、精神障害者（主に統合失調症）の方々の自立と社会復帰を促進すること。

所在 東京都港区

ホームページ <http://www.minatonet.min.gr.jp>

### ○プロジェクトの目的と概要

みなとネット21は、精神障害者の自立や社会復帰を促進する活動をしている、医療・福祉の専門家集団である。精神病院の脱施設化の受け皿としての地域ケアは、専門領域を異にする多職種チーム（精神科医、かかりつけ医師、保健師、看護師、精神保健福祉士、臨床心理専門職、薬剤師など）による包括的取り組みが大切だが、そうした専門家チームを中心にして、精神障害者の生活範囲の拡大、本人や家族の生活の質や満足度の向上につながるようなシステムづくりに取り組んでいる。

今回は、「2つのNPOのコラボレーション～脱施設化した精神障害者の社会参加の促進にむけて～」プロジェクトである。

ささがわホスピタル（福島県郡山市）は、2002年3月末に、精神病院を閉鎖し、そこから2つの団体を発足させた。ささがわヴィレッジ（精神障害者の共同住宅）とNPO法人アイキャン（精神障害者地域生活支援センター）である。

みなとネット21は、以前から、包括的メンタルヘルスサービス（OTP、Optimal Treatment Project）を通して、ささがわホスピタルとつきあいがあったが、今回改めて、自分たちの知見を増やすと共に、活動を広げるための組織連携に挑戦したのである。

### ○活動内容と成果

みなとネット21は、NPOアイキャンと協働で、精神障害者の希望者に対して、OTPを使った金銭管理・栄養管理（調理を含む）・健康管理の講習会を開催した。原則として、家族も一緒に参加してもらった。患者のべ93人とその家族が参加した。講習会が目指したのは、生活の自立支援であり、社会参加の促進である。

OTPの基本理念は、地域で生活する精神障害者自身とその支援者が疾病の理解を深めることによって、再発を未然に防ぎ、かつ「その人らしく」生活するためのケアプランを立て、医学的な治療のみならず心理的・社会的・経済的な包括的なアプローチを継続的に行うことである。

こうした理念を踏まえて、計画通りに講習会を開催し、プ



ロジェクトとしての成果はあげられたが、NPOのコラボレーションに関しては2つの課題が浮かび上がった。

第1は距離の問題である。東京と福島県郡山は離れているので、時間的・金銭的なコストがやはり大きな負担になった。第2は、組織形態の違いである。アイキャンは有給スタッフが対応したが、みなとネット21は別に職を持っているスタッフが無償のボランティアとして参加した。そのため、たとえば、アイキャンが勤務時間中の打ち合わせを希望する一方で、みなとネット21は勤務時間外での打ち合わせを希望するというように、活動の仕方にも微妙な差が出てきた。

こうした問題はあったが、それぞれのNPOが自分たちの強みを生かしながら、講習会を効果的なものにしていくことができた。また、お互いに学びあうことも多かった。

### ○これからの展開

みなとネット21は、政策提言（アドボカシー）を中心に活動する団体である。今回はアイキャンとのコラボレーションというかたちで、実践活動にも関わったが、自分たちが取り組んでいるOTPの有効性を改めて実感したという。

厚生労働省は、2002年4月から精神病院の脱施設化の受け皿として、地域生活支援センターを設立しているが、それ以前からみなとネット21が推進しているOTPとは、路線が異なっている。したがって、地域生活支援センターをつくらうとする自治体とのコラボレーションは難しい。

みなとネット21としては、OTPが精神病院の脱施設化の方策の一つとして有効であることをさらに検証していくとともに、病院や診療所に対してOTPの採用を提案していきたいと考えている。その一方で、村上さんは、今回のプロジェクトを学会で発表し、学術的な評価を高めたいとも考えている。

今回のプロジェクトの体験は、そうした活動にも大きな自信を与えたようである。

## ■高齢者・障害者が主役となった幡多昔むかし祭の開催

### NPO法人 高知県介護の会

団体名：NPO法人高知県介護の会

代表者：荒地平

設立時期：2000年3月15日

目的：地域のすべての人に、生きがいづくり、健康の増進、社会参加の促進の面で役立っていくこと。

所在：高知県中村市

#### ○プロジェクトの目的と概要

高知県介護の会は、宅老所「つどいの場 えびす」を拠点に、「子どもからお年寄りまで、障害のある人もない人も、みんなが仲良く住み慣れた所で安心して暮らせる社会づくり」を目指して活動しているNPOである。「えびす」には毎日、15人前後のお年寄りや障害者が集まるが、地元の小学生との交流や施設を活用した「ふれあい喫茶」など、地域に開かれた活動に心がけている。

利用者のお年寄りもみんな元気である。昨年、利用者たちから「地域活性化に一役買いたい」という声が出てきて、演芸大会を開催した。地元周辺の人が200人以上も集まってくれた。そこで、もっと大掛かりな「幡多昔むかし祭り」を開催しようということになった。それが今回のプロジェクトである。幡多とはこの地方一帯の名前である。

昔は、地域ぐるみの運動会や学芸会、映画の上映会や季節の祭りなど、みんなが集まって交流できる場がたくさんあったが、最近は地域を通じた交流が少なくなり、それと関連して伝統芸能も忘れられがちだ。伝統食や伝統芸能といえば、お年寄りの出番である。

#### ○活動内容と成果

1日だけの祭とはいえ、準備は大変だった。昔ながらの豆腐作りやこんにやく作りを再現することになったが、かつては達人だったお年寄りも、作り方を忘れかけており、最初はうまくつくれなかった。材料の手配も大変だ。豆腐作りではにがり海水を使うことにしたので、海まで海水を取りに行かなければならない。年寄りだけでは限界がある。

幸いに、民生児童委員や農協女性部、区長会、老人クラブ、食生活改善委員などが次々と協力してくれるようになり、結局、100人を超える人たちが実現を支えてくれることになった。「地域のみんなで力を出し合い、地域の活性化につなげたい」というプロジェクトの目標は、準備段階で見事に実現したとあっていい。

祭の当日(2003年1月25日)は幸いに好天に恵まれた。伝統食を楽しむ会では、お年寄りたちが中心になって豆腐作りやこんにやく作りの実演、餅つきやサワチ料理、ある



いはポン菓子など、昔懐かしい風景が再現された。料理ができた後は、屋外の駐車場にテーブルを出して、野外昼食会。飛び入り参加も含めて、子どもからお年寄りまで100人を超すにぎやかで和やかな大パーティになった。こうした風景を久しぶりに見たと感激する人も少なくなかった。

午後は、近くの中学校の体育館を借りての演芸大会。ここの250人を超す盛況になった。受付は午前中、伝統食づくりの先生になっていたお年寄りたちである。いつもと違って、今回のイベントではお年寄りが参加者の世話をする側にまわったのである。

「自身に満ち溢れたお年寄りや障害者の笑顔が忘れられない」というのが、事務局として苦勞した豊永美恵さんの感想である。

#### ○これからの展望

祭は大成功だった。豊永さんは「みんなの心が一つになれば、どんな困難も乗り越えられるし、誰かに認めてもらうことによって、素晴らしい力が発揮できるのだと改めて思いました」と語ってくれた。

その後、若い人たちからも、豆腐やこんにやくの作り方を教えてほしいとか、そうして作った豆腐が欲しいという問い合わせも来ているという。伝統食の良さが見直されて、また新しい物語が始まるかも知れない。

豊永さんが一番うれしかったのは、今回のプロジェクトでお年寄りたちがみんな若返ったことである。準備は大変で、苦勞の連続だったが、お年寄りたちはその苦勞を元気に変えていったという。またやってみいたいという声も多い。

高知県介護の会では、「受け継がないといけな地域の味や伝統芸能を発表する場として今後の祭を続けていきたい」という思いから、これからも継続していきたいと考えている。そして、すでに10月に第2回幡多昔むかし祭を開催することになっている。

こうした祭が全国に広がっていけば、コミュニティケアも今とはまったく違ったものになっていくだろう。



## ■ 10代のファミリーサポーター養成プロジェクト NPO法人 福井県子どもNPOセンター

団体名：NPO法人 福井県子どもNPOセンター

代表者：岸田 美枝子

設立時期：1999年9月13日

目的：子どもの文化権（遊び・余暇・ゆとり・文化的芸術的体験への参加）を拡充し、子どもの社会参画を図ることにより、子どもの育つ豊かな地域の文化環境づくりに寄与する。

所在：福井県福井市

ホームページ：<http://www8.ocn.ne.jp/~childnpo/>



### ○プロジェクトの目的と概要

福井県子どもNPOセンターが目指しているのは、未来を担う子どもたちが健やかに豊かに育つ地域文化環境づくりである。県内の諸団体とネットワークしながら、さまざまな活動に取り組んでいる。

今回のプロジェクトは「10代のファミリーサポーター養成プロジェクト」。これまでも子どもたちと接する教師や保育士などを対象とした講座を開いてきたが、10代を対象とした講座の開催は今回がはじめてである。

子どもが子どもをサポートするというと、日本ではまだめづらしいが、海外では10代のベビーシッターは日常的だ。子どもの感性で子どもとつきあうことは、子どもでしかできない社会参画である。しかも、それはやがて親になる子どもたちにとっては、幼児の「すごさ」を実際の体験を通して学べるいい機会でもある。

センターでは、当面は講座形式でサポーターを支援していくが、将来的には受講生による自主運営グループを立ち上げ、子育て支援派遣のコーディネートができるような体制に持っていきたいというビジョンをもって、このプロジェクトに取り組んだ。

### ○活動内容と成果

こうしたプロジェクトの成否は講座のプログラム内容によって決まるといっても過言ではない。そこでセンター内にプロジェクトチームをつくり、講座の開発に取り組んだ。高校生や短大生にも参加してもらい、受講する立場からの検討も行った。

内容も単なる座学だけではなく、見学や実際の保育体験など、とにかく現場に出向く体験学習を重視した。フィールドの設定は大変だったが、これまでのネットワークのおかげで、充実したプログラムが開発でき、参加者には好評だった。

第1回の養成講座は助産院訪問だった。スライドを見ながら出産の様子や家族の話を聞き、その後、院内を見学、そして数日前に生まれた赤ちゃんを抱かせてもらった。参加者にとっては初めての体験だった。「子どもは生まれる時に生まれてくる。お産は家族のはじまりである」という、助産婦

の先生の話も大きな感動を与えてくれた。

これに続き、全部で7回の講座を開催した。毎回、受講生に興味をもってもらうようにテーマやスタイルも工夫した。

残念だったのは参加者が少なかったことだ。20人の定員に対して、15歳から19歳の若者たち14名の参加にとどまった。しかも女性ばかりだった、高校の先生の協力が得られたことで、高校生の参加が中心になったが、試験と重なったりして、すべての講座に参加した受講生が少なかったことも反省点である。

しかし、子どもを対象とした講座プログラムから得たものは大きい。また、この活動を通して新しいネットワークも広がった。これも大きな成果である。

### ○これからの課題

近年、幼児虐待や子育てがわからないという親がふえている。10代のときに幼児と接する体験は、子育ての大切さを肌で理解させる素晴らしいプログラムだ。親になる喜びや自信を育てていくことを通して、少子化問題への対策にもなっていく。こうした活動はますます重要になっていくだろう。

幸いにして、今回の活動が県に評価されて、県からの委託事業として、今後3年間継続できることになった、県下の全高校に参加者を呼びかける計画である。

プログラム内容もさらに進化していくだろう。今回は安全性の面から、保育園などでの体験は実現できなかったが、今回は一般家庭での保育体験も検討されている。

さらに、このプロジェクトそのものの推進に関しても10代の実行委員を組織して推進役を担ってもらう計画もある。子どもたちの企画力や運営力には大きな期待をしている。

この講座を受講した若者たちが、県内のさまざまな会議やイベントなどで乳幼児や小学生の託児を担当していけるようになってほしいと理事長の岸田さんは考えている。一般家庭へのベビーシッター派遣も、もちろん目標の一つである。

10代の若者たちが社会を大きく変えていく時代もそう遠い先ではないかもしれない。



## ■視覚障害者と映画を楽しむための環境整備

### City Lights バリアフリー映画鑑賞推進団体

団体名：City Lights バリアフリー映画鑑賞推進団体

代表者：稲葉千穂子

設立時期：2001年4月1日

目的：目の不自由な人とともに、映画を楽しむことのできる環境づくり

所在：東京都北区

ホームページ：<http://www.citylights01.org>

#### ○プロジェクトの目的と概要

City Lights は、目の不自由な人にも映画を楽しむことができる環境を整えることを目的としたバリアフリー映画鑑賞推進団体である。代表の稲葉さんは、映画館で働いていたとき、目の不自由な人を対象に、チャップリンの「街の灯（シティ・ライツ）」の上映会を企画した。資金が集まらずにこの上映会は実現できなかったが、そのとき集まったメンバーを中心に、この団体を発足させた。

今回は、「映画館における視覚障害者同行鑑賞会開催の環境改善」プロジェクト。簡単に言えば、できるだけ多くの視覚障害者の人たちに、映画を楽しんでもらう環境を整えようということである。

City Lights では当初、1人の視覚障害者に1人のボランティアの解説者がつくという形をとっていた。しかし、それでは、参加者の増大に応じられなくなってきた。お芝居で、何人でも聞けるFM送信機の音声ガイドを使っていることを知り、今回は、このFM送信機の購入とこれを使った同行鑑賞会の開催に取り組んだのである。

#### ○活動内容と成果

今回の助成資金で、準プロ仕様の音声ガイドシステム（ミキサー、FM送信機など）を購入することができた。これにより、多数の参加者に安定した音声ガイドができるようになった。しかし、音声ガイド制作スタッフや鑑賞会サポーターの増員が必要であり、そこが今回、苦労した点の一つだった。幸いにメンバーの努力で、月1回の開催という目標を大きく超えて、システム導入後の半年間で14回の鑑賞会を開催することができた。

音声ガイドの制作作業はかなり大変である。字幕読み（4人）と画面のガイド（1人）の5人がチームになって、映写室で映画を見ながら音声を吹き込む。シナリオは配給会社から提供してもらおうが、画面説明は映画を何回も見てみんなで作っていく。ビデオ化されている映画はいいが、そうでない新しい映画の場合は、メンバーが直接映画館に通って、気づいたことを持ち寄ってみんなで制作する。熟練が必要なのでできる人が限定されてしまうのが悩みだが、そのノウハウも次第に蓄積されてきている。



鑑賞会を開催するにつれて、協力してくれる映画館も増えてきた。新聞やテレビが取り上げてくれたおかげで、City Lights の知名度も上がり、活動しやすくなってきた。

音声ガイド付きの映画上映に関心を持つ配給会社や映画館も増えてきた。2003年4月に、日比谷シャンテ・シネは「星に願いを。」という日本映画を音声ガイドつきで上映したが、映画館からの要請でCity Lights は共催のかたちで参加した。館内の一画を音声ガイド席にしてもらったので非常にやりやすかったという。興行は、3日間で140～150人も参加してくれ大成功を取めた。

#### ○これからの展開

視覚障害者向けの映画上映会への動きは広がっており、City Lights への依頼も増えている。それに伴い新しい課題も生まれてきている。

第1は、音声ガイドスタッフの育成である。活動を広げていくためにも、音声ガイドの質を高めていくためにも、人材を育てていくことが必要だ。そこで、映画音声ガイド制作研究会を開催し、音声ガイドができる人材の養成に取り組みだしている。

第2は、活動資金の確保である。同行鑑賞会を開催するには、同行する人の交通費や映画館の入場料などの実費が発生し、会費収入だけでは賅いきれない。活動を持続させていくためには、活動からの収入を考えなければならない。実際に社会的な需要は多く、事業化の可能性は十分ある。しかし、安直に事業化してしまうと、これまでのCity Lights の良さが薄れてしまうのではないかと声もある。

課題は新しい可能性につながっている。City Lights は活動が成功したが故の悩みに直面しているが、きっと新しい展開に向けて楽しい輪を広げていってくれるだろう。

## ■「教えてキーパーソン！」サイト構築とシステム運営 NPO法人 キーパーソン21

団体名：NPO法人キーパーソン21

代表者：朝山あつこ

設立時期：2000年12月10日

目的：中高生たちと誇りを持って仕事をする社会人との出会いの場と、生徒の夢としての職業を考えるためのプログラムを提供すること。

所在：神奈川県川崎市

ホームページ：<http://www.keyperson21.org>

### ○プロジェクトの目的と概要

キーパーソン21は、中高生たちに将来の夢と職業意識を持ってほしいと願っているNPOである。代表の朝山さんは中学生の長男の学級崩壊に遭遇した。どうして暴れる子どもや無気力な子どもが生まれるのか。朝山さんは、その原因は、子どもたちが将来の夢を持っていないからではないかと考えた。子どもたちの周りには、見習うべき大人は、両親と学校の先生だけ。それでは、子どもたちの夢は育ちにくい。人生設計という視点で、子どもたちに仕事や職業を考える場をつくってやりたい。そう考えて、社会人が学校に出向き、自分の職業体験を話してもらう活動を始めたのが出発点である。

活動の柱は「自分の夢発見プログラム」。誇りを持って仕事をする人との出会いをきっかけに、中高生たちに夢としての仕事を見つけてもらうプログラムである。

参加した生徒たちはそれぞれに仕事への夢を抱くようになるが、夢はさまざまであり、それぞれを応援していくことは不可能である。そこで、生徒がオンラインで気軽に相談できる、「教えてキーパーソン！」サイトを立ち上げることになった。プログラムに参加した子どもたちが、感想や相談を書き込むことができる会員専用サイトである。これが今回のプロジェクトである。

### ○活動内容と成果

プロジェクトの内容は、相談掲示板サイト構築と相談に応じる仕事人の登録である。

サイトは、当初、内部スタッフが開発する計画だった。しかしシステムに個人認証機能を持たせるには高度な技術が必要なことがわかり、結局、外注せざるを得なくなったため、スケジュールが遅れ、システムの試運転の時間が少なくなってしまったという。しかし、最初から外注しなかった姿勢こそを評価したい。時間はかかったかもしれないが、学んだことも多かったはずだ。

仕事人の登録は、これまでの活動で蓄積されてきた人脈と信頼関係のおかげで順調に進んだ。これまでキーパーソン21の活動に関わってもらった社会人に年会費1万円で会員



になってもらい、仕事人として登録してもらった。20人程度の仕事人が集まった。仕事人は、その職業のプロであっても、子どもの相談に答えるプロではない。そこで、登録者にはカウンセラーによる講習会を受講してもらうことにしている。

2003年5月に私立小野学園女子中学校(東京都品川区)で、自分の夢発見プログラムの講演授業を開催した。その授業を受けた子どもたちにパスワードを発行して、完成した「仕事についての相談掲示板」にアクセスしてもらった。「教えてキーパーソン！」サイトのスタートである。書きこまれた質問や感想に対して、仕事人はそれぞれ適切な回答をしてくれた。これまでの単純な掲示板とは違って、かなり踏み込んだ相談の受け答えができるため、自分の夢発見プログラムは一段とパワーアップした。

### ○これからの展望

今回のプロジェクトで、自分の夢発見プログラムの全体のシステムが完成した。今年度はさらに3つの学校での授業を予定されているが、このサイトは活用されればされるほど育っていく。成長が楽しみである。

新しい動きもでてきた。サイト開発後の第1号のプログラム実施校である小野学園では、成果を評価し、全校をあげて「自分の夢発見プログラム」に取り組むことになり、中学高校6か年のキャリア形成プログラムを開発していくことになった。これが実現すれば、生徒は、6年間で18人の仕事人と出会うことができるようになる。自分を知り、家族を知るワークショップやゲームも取り入れる予定だ。

社会心理学などの専門家も含めた、教材開発のプロジェクトチームも発足した。このプロジェクトは、キーパーソン21にとって、経済的に自立した事業型NPOへの進化の契機になるかもしれない。

「自分の夢発見プログラム」はまだまだ発展していくだろう。子どもたちの世界にどんどん新しい風を吹き込んでもらいたい。

## ■乳がんと共に生きる人たちの〈わくわく〉コミュニティづくり 声を聴き合う患者達&ネットワーク VOL - Net

団体名：声を聴き合う患者達&ネットワーク VOL - Net

代表者：伊藤朋子

設立時期：2002年4月28日

目的：乳がん患者の命の声を聴き合うことから、乳がん患者の生活の質の向上や乳がんにかかわるすべての人や団体のよりよい関係づくりを実現していくこと。

所在：東京都新宿区

ホームページ：http://www.vol-net.jp/



### ○プロジェクトの目的と概要

VOL - Net は、乳がん患者の声を聴き合うことを目的とした自助グループである。乳がん患者の団体は、歴史のある会、数千名の会員がいる会などたくさんある。しかし、メーリングリストで出会った30～40歳代の仕事を持っている仲間が、既存の団体とは違った、自分たちの生活・命の質(QOL)を高めることに重点をおいた活動をしたいと考えて、この団体を立ち上げた。

がんは、医者にとっては切ったときに終わるが、患者にとっては切ったときに始まる。病気と共存しながら自分らしく生きていくかをみんなで一緒に考えていきたいというのが、VOL - Net のテーマである。

今回のプロジェクトは、そうして立ち上げたグループの基盤が最大の目的である。会の実体としての、乳がんと共に生きる人たちの相互支援・交流の場を育てていくと共に、会の存在を社会に情報発信していくためのイベントや活動を自分たちでやっていこうというプロジェクトである。

### ○活動内容と成果

活動内容は多岐にわたっている。

まず会の基本活動として、「VOL - Net の会」の定例化を実現した。第1部は専門家を招いての勉強会、第2部は乳がん患者だけのグループセッションを行っている。参加者も増えてきており、7月には60人も参加した。

社会への情報発信もVOL - Net が重視している活動である。「私らしく生きる」をテーマにした『私のおしゃれ探求会』(2003年2月開催)は、250人も参加者を集めることができた。メンバーのなかに、イベントプロデュースやディスプレイの専門家がいることが、そうした活動を実現する上での強みになっている。

「患者言葉の乳がん用語集」もメンバーの手で完成し、2002年末からホームページで公開しており、アクセス数はすでに3万人を超えた。「治療フローチャート」も公開間近である。

手術後・化学療法後のおしゃれ関連のアンケート調査も実施した。その結果から、患者が困っている治療の副作用に対する具体的な対策や工夫を、企業や医療関係者などへの取材

を重ね、小冊子にまとめている。

こうした活動で勢いがついて、当初、予定していなかった活動も実現できた。日本乳癌学会へのブース出展である。実際のかつらや下着を手にとりていただくなど、具体的な工夫を伝えた。患者から医療者への発信ができた点は画期的であり、マスコミでも取り上げられ、医療界からも高い評価を受けた。市民活動のアイデンティティは社会との関係において育っていく。

社会への情報発信や外部との交流に力を入れていくことは、会の基盤をつくる上で重要である。

### ○これからの展開

会としての基盤はできたが、活動を通して2つの課題が浮かび上がってきた。

1つめは、メンバーが仕事を持っているため、日常の連絡などは、電子メール中心だが、それだけだと、微妙なニュアンスが伝わりづらく、プロジェクトの進行に時間がかかる。オンラインの活動はオフラインの活動と組み合わせさせてこそ、効果があげられる。これからはメンバー同士で集まる機会を増やしていきたいという。

2つめは、事務所がないため、会議の場所や販売物や印刷物の置き場に困る点である。自分たちの事務所を持つことが次の目標である。

そのためにも、さらに組織を整えていく必要がある。経済的な自立も考えていかねばならない。ディレクター(事務局)のなかでは、事業型NPOをめざすというコンセンサスができていく。自前で良質なサービスを提供し、行政や企業と対等にわたれるようにするには、きちんとした組織づくりが必要である。NPO法人化の検討もしていくという。

日本乳癌学会のブース出展が好評だったため、病院からの講演依頼もくるようになった。また、下着メーカーやかつらメーカーと一緒にあって、乳がん患者のための商品開発を手がけることも検討したいと考えている。

課題は山積みだろうが、事業型NPOを目指して、VOL - Net が新しいNPOの地平を開いてくれることを期待したい。

## ■大阪市民のオアシスは Zoo っところ！ おんなの目で大阪の街を創る会

団体名：おんなの目で大阪の街を創る会

代表者：小山琴子

設立時期：1993年12月8日

目的：高齢者、子ども、障害者はもとより、すべての人にやさしいまちづくりを利用者の立場に立って、バリアフリーの視点で考え、調査、研究、提案をする。

所在：大阪府大阪市

### ○プロジェクトの目的と概要

女性たちはまちや公共施設の「利用の専門家」。こういう視点で、人にやさしいまちづくりに向けて提案し、行動していこうというのが、おんなの目で大阪の街を創る会の精神である。この会は1993年に女性社会セミナーを受講した有志が立ち上げたグループで、運営もサークル的だが、行動力には定評がある。「人にやさしい駅」をテーマに、2年間にわたり、大阪の地下鉄111全駅のバリア一度を点検し、女性ならではの実践的な提案をまとめて改善を働きかけた実績もある。この活動は大阪NPOアワード97でグランプリを受賞した。

今回、対象にしたのは大阪市天王寺動物園。題して、「大阪市民のオアシスは Zoo っところ！」。副題が、「天王寺動物園を市民が楽しみ、学び、憩える空間に」とあり、地域資源としての動物園を活性化し、四季を通じてみんなが多目的に楽しめる市民のオアシスにしようという壮大な構想である。活動を通して、法人格を持たない団体と行政との協働の実践的モデルを創りだすことも目的に掲げている。

今回のプロジェクトの目標は、そうしたプロジェクトの出発点として、さまざまな市民の声を取り入れて構想をまとめる材料を整理すること、構想実現に関心を持つさまざまな人たちのネットワークをつくっていくこと、の2つである。

### ○活動内容と成果

最初に取り組んだのは、天王寺動物園に関する利用者の意見の集約。四季を通じてできるだけ多くの人たちから生の声を集めようと、さまざまな形での調査を行った。アンケート調査は、季節を通じて10回にわたり合計1000人近い人から回答を得たし、さまざまな立場の人たちに参加してもらい、園内見学後に意見をだしてもらったりもした。子どもや車いす利用者に自由に園内を回ってもらい、それに同行して様子や会話を記録する追跡調査、周辺環境調査、協力者からの見学感想集めなども行った。

時間がかかっても、自分たちが納得できるようにするのが、この会の身上である。回を重ねるにつれて、職員たちの意識の変化が伝わってきて、うれしかったという。

ネットワークづくりに関しては、動物園内などで公開学習



会を5回開催した。毎回、ゲストを中心にしたワークショップを行ったが、園の職員や学生たちにも協力してもらいながら、仲間を広げていくことに成功した。ろうあ者の参加という新たなネットワークの広がりも生まれたという。

公開学習会で行った発泡スチロールと羊の毛を使った実物大の羊作りも好評で、作品は動物園の催事に展示され、同時に「あなたにとって天王寺動物園はどんなところだったらいですか」というシールアンケートも行われた。

こうした活動は新聞などでも取り上げられ、このプロジェクトも少しずつ市民に知られだしてきた。

### ○これからの展望

地道な作業やワークショップなどを通して、構想づくりの材料は少しずつまとまりだしている。調査の分析や構想への展開はメンバーにとっては難しい課題だが、これだけしっかりした調査を重ねてきたメンバーにとっては、構想はもう見えてきているのかもしれない。

ちなみに、こうした彼らの調査活動は企業やシンクタンクからも高い評価を得ている。調査を依頼したいとか、一緒に仕事に取り組みたい、という声も出てきている。NPOが強みを育てていくことで、自立の基盤を確立するという、事業型NPOのひとつのモデルになるかもしれない。示唆に富むケースと言っていい。

「行政との協働のあり方」も、専門家のアドバイスを受けながら、まとめていくことになっている。

プロジェクトの当面の目標は達成できたが、この構想はこれからが本番である。まだ出発点に立ったにすぎない。これまでの調査結果をもとに、広がったネットワークを活用しながら、おんなの目で大阪の街を創る会はこれからも活動を広げていこう。

天王寺動物園が、大阪市民の「Zoo っところオアシス」に生まれ変わるのが楽しみである。

## ■ドメスティックバイオレンス研修ビデオの作成 NPO法人 フェミニストサポートセンター・東海

団体名 NPO法人フェミニストサポートセンター・東海  
 代表者 隠岐美智子  
 設立時期 1999年3月1日  
 目的 すべての女性の人権が尊重され、自立した生活が可能な社会の確立。  
 所在 愛知県名古屋

### ○プロジェクトの目的と概要

フェミニストサポートセンター・東海（F S C東海）は、女性の人権尊重と自立した生活実現に向けて、当事者支援と社会的提言活動（アドボカシー）に取り組んでいるNPOである。

男女共同参画社会基本法やドメスティックバイオレンス（DV）防止法の成立など、女性に対する暴力への社会的関心は高まっているが、その正確な認知や実態把握はまだまだ進んでいない。社会的な認知、主体的な取り組みを進めるためには、被害当事者の声に耳を傾ける事が重要だが、研修などにおいても、現実にはなかなか生の声を伝えることは難しい。

そこで今回のプロジェクトでは、これまで培ってきた当事者グループとの信頼関係とF S C東海が蓄積してきた情報やノウハウを組み合わせ、被害者の声を伝えるためのビデオ「被害者の声から学ぶー今何が必要か」の作成に取り組むことになった。DVの解決のためには、被害当事者への直接的な支援と並んで、地域に住む人たちの啓発活動が不可欠だが、ビデオ教材ができれば、効果的な啓発活動が可能になる。

### ○活動内容と成果

テーマがテーマだけに慎重な取り組みが必要だった。まず、これまでつきあいを重ねてきた当事者グループ「フィリア21」の協力を得て、当事者への時間をかけた聞き取り調査を行った。そしてそれに基づき、内容をつくりあげていった。多角的な視点からの検討をしてもらうために、県内在住の研究者や専門家にも参加してもらった。

並行して当事者であるビデオ出演者や製作スタッフとの打ち合わせも繰り返し行った。いずれにもプロジェクトの主旨を理解してもらい、共感してもらわなくてはならない。微妙な内容だけに、共感がどのくらい得られるかで作品は大きく変わってくる。幸いいずれからも共感を得ることができ、その上、主旨に賛同してくれた製作スタッフは破格の費用で協力してくれることになった。

ビデオは4月に完成した。被害当事者出演のビデオは、専門家にも一般の人にも大きなインパクトを持つ充実したものになったが、ビデオが一人歩きしないように、ビデオを核に



した総合的なプログラムが不可欠である。そこで、弁護士、児童相談所相談員、カウンセラー、ソーシャルワーカー、行政担当者などの専門的実務者に加えて、社会学、臨床心理学、法学などの研究者にも参加してもらい、研修プログラムの開発と教材づくりに取り組むことになった。

当事者の生の声を正面から取り入れたビデオに対しては、外部からの期待も大きい。それに応えるためにも、効果的なプログラムを開発しなければならない。いいプログラムが完成して、初めてこのプログラムは完成する。

### ○これからの展望

今回のプロジェクトではビデオ作成のほかにもさまざまな成果を得ることができた。ソーシャルワーカーでもある事務局長の河合容子さんは語ってくれた。作成の過程で当事者を含め、さまざまな立場の方から多くの意見をもらうことができたし、当事者との時間をかけた話し合いもできた。それらは、ビデオづくりを超えて、F S C東海のこれからの活動に大きな影響を与えていこう。

各分野の実践者や研究者とのネットワークも広がった。これからの市民活動にとって大切なことは、テーマを超えたコラボレーションである。これもこれからの活動の財産になっていく。

現段階では、安易な宣伝や情報公開は控えているが、秋からは暫定プログラムを研修の中で実施していくことになっている。それを踏まえて、さらにプログラムの内容を精査し、向上させていく。そして、プログラムが完成したら、DV対応専門家向けの研修教材・プログラムへと発展させていく計画で、すでにその準備も進めている。

ビデオづくりを目標としたプロジェクトだったが、ビデオの完成は終わりではなく、むしろ始まりだ。このビデオをどれだけ活かしていけるかは、F S C東海の力量にかかっている。ぜひとも新しい風を起こしていただきたい。

## ■エイズ教育プログラム作成プロジェクト 東北HIVコミュニケーションズ

団体名：東北HIVコミュニケーションズ

代表者：小浜耕治

設立時期：1993年12月3日

目的：HIV感染症/AIDSによって自らの生命や生き方に影響を受けた人々が、共に生きる社会をつくりだすこと。

所在：宮城県仙台市

ホームページ：<http://www.miyagi-npo.gr.jp/thc/>

### ○プロジェクトの目的と概要

東北HIVコミュニケーションズ（THC）は、「共に生きる社会をつくりだす」という理念のもとに、幅広い視点でエイズ教育に取り組んでいるNPOである。エイズ教育は、単なる医学的知識のみでなく、社会的意味、性に対する理解、感染者との共生のためのルールやマナーなど、社会的な視点からの取り組みが必要である。医師や教師だけの対応では限界がある。そこにNPOが活動する意味が存在する。

THCは活動を開始してからすでに10年になる。そこで、これまでの活動の集大成として「エイズ教育プログラム」を作成することになった。それが今回のプロジェクトである。目標は、HIV/AIDSについての知識の啓発、感染予防のスキルや方法の提供、感染者/患者との共生感覚の涵養が可能になるような、体系的な研修プログラムの開発である。

プログラム完成後は、それを活用した研修を展開することで、THCの活動財源を安定させ、さらにはTHCの活動を飛躍させるための契機にしたいという思いもあった。

THCでは3年前からAIDS基礎講座を開催しているが、最近ではその蓄積から対象者に合わせたプログラミングが可能になりつつあること、また学校などからの講演依頼が増えていること、など、そうしたプロジェクトに取り組む内外の条件は整ってきていた。

### ○活動内容と成果

まず、これまで取り組んできた研修や講座、ワークショップなどをテーマ別に再編集し、蓄積されてきた情報やノウハウを体系化することから開始した。それらを使って、ビデオ教材、パネル、スライド、小道具などのキット、およびスタッフ用のマニュアルテキストを作成していこうという計画だった。当初は、これでかなり完成度の高いものができると考えていたが、実際に取り組んでみると、もっと深めていくべき視点や開発すべきスキルなどがあることが、改めて見えてきた。

そこで研修プログラムのパイロット版を作成し、それを実際に使って、自分たちの視野やスキルを高めながら、内容をより深めていくという方針に切り替えた。外部の人たちにもアドバイスを願った。研修プログラムは実際に使いな



ら、多様な目でチェックし、常に進化させていくべきものである。こうした取り組みを評価したい。

仙台市内の中学校などで、パイロット版を活用した授業を実際に行ったが、非常に効果的だった。THCではこれまで多くのノウハウを蓄積してきたが、体系的に整備されていなかったために、使い勝手が今ひとつだった。今回、パイロット版とはいえ、誰もが使いやすい形に集約されたキットができたので、効果的な研修活動ができるようになった。受講した生徒たちからの評価もよかった。

また実際に講座などを開催し、気づいたことをパイロット版に追加していくことで、THCの共通財産を増やしていくことが容易になったことも大きな成果である。

### ○これからの展望

パイロット版ということから本格的な広報活動はまだ行っていないが、すでにプログラムを使った講座や研修、学校での授業協力が始まっており、いずれも効果をあげてきている。さらにプログラムメニューの充実をはかり、しかるべき体制が整ったら、本格的な広報活動を実施し、地域に広めていく計画だという。

THCの理念は「共に生きる」である。しかし、この言葉は、漠然としており、それが具体的に何を意味するのかの問いかけがなければ単なる標語になってしまいかねない。

今回のプロジェクトは、まさにその「問いかけ」を形にしたものだ。今回のプロジェクトリーダーの塩入康史さんは考えている。研修プログラムのテーマはさまざまだが、すべてに通底しているのは、この問いかけである。参加者が、自らに問いかけ、自ら答を見つけ出していく。このプロジェクトが、そうした動きを促進する触媒になれば、それこそが最大の成果とっていいだろう。

## ■心と心をつなぐ音のプレゼント 音のボランティアグループ花音<sup>かのん</sup>

団体名：音のボランティアグループかのん花音

代表者：吉田高子

設立時期：2001年7月1日

目的：音による楽しい時間のプレゼントを通して、癒し、支え合い、ともに生きる喜びを分かち合うために、真心をこめたボランティア活動を展開していく。

所在：大阪府大阪市

URL：http://www2.odn.ne.jp/~har36520/

### ○プロジェクトの目的と概要

花音は、朗読ボランティア養成講座修了者と音楽教師を中心にしたボランティアグループである。病院や福祉施設を中心に「音による楽しい時間のプレゼント」活動を行っている。音を通じて、病んでいる人、疲れている人、困難を抱えている人を、励まし、癒し、心の支えになりたいというのが、花音の思いである。

これまでは、訪問しての対面朗読活動だったが、活動の対象を広げるためにCD版「音の文庫づくり」に取り組むことになった。

朗読サービスは視覚障害者に限定されがちだが、音の効用を考えれば、もっと対象を広げていってもいい。たとえば、代表の吉田さんは医療関係の仕事をした経験から、入院患者たちが病室で過ごす「孤独な長い夜」が気になっていた。自分たちの朗読をCDにして配布したら、そうした人たちの時間をもっと楽しく、豊かなものにできる。市販されているCDもあるが、作品が限られており、高価でもある。花音が考えたのは、もっとさりげない作品のCD化だった。

CDと並んで取り組むことにしたのが、情報発信のためのホームページづくりだった。CDによる音の文庫の貸出・配布もホームページでやっていけば活動は広がっていく。

### ○活動内容と成果

CDやホームページづくりのためにはIT技術が必要である。また録音環境も重要であり、さらに著作権の問題や題材さがしなど、新たな課題も次々と出てきた。しかし、新しい課題は活動の幅を広げ、新しい出会いを生む。出会った人びとを仲間に巻きこんで、主体的にどんどん関わってもらおうのが花音流である。

幸いといい題材との出会いもあった。毎日新聞に掲載された「グッドガール！ シンシア」である。シンシアはテレビでも取り上げられた介助犬だが、たまたま吉田さんもボランティア活動で関わりがあった。新聞社に主旨を話したところ、録音媒体への使用を快諾してくれた。どんな題材を選ぶかも、花音の大きなメッセージになるので、慎重な選択が必要だったが、他にもいくつかの魅力的な作品にめぐり合えた。

問題は録音だった。対面朗読では気にならなかった音質や



雑音が、録音の場合は非常に問題になることがわかってきた。また、費用の関係で、自分たちで録音するため、機材の使い方も習得しなければならない。メンバーにとってはこれまでとは全く違う課題に取り組む必要があった。しかし、ボランティアの作品だからという言い訳は許されない。試作版は完成したが、もっといいものにしたいというメンバーの意見で、完成度をたかめている段階である。秋には2作品が完成の予定だ。

ホームページについても、外部の協力を得ながら進めたが、費用の点でも、継続という点でも、できるだけ自分たちで技術を習得しようという姿勢で進めている。当初は音声発信付きのホームページを考えていたが、まずは音声なしのホームページからスタートした。5月にホームページは開設し、メンバーの技術も向上してきた。

### ○これからの展望

CD化と並行して目標にしていた、NPOなどの活動誌の朗読サービスも準備が整いつつある。そうした活動によって、他のNPOやボランティアグループとのつながりを増やしていけば、花音が手伝える事はさらに広がっていくだろう。すでにコムケアで知り合った団体との交流も始まっている。

CDづくりは体制も技術も整ってきたので、秋以降、作品も増えていくだろう。CDを活用してもらうことで、これまでの病院や施設へのボランティア活動も新しい展開が期待される。まだ課題はいろいろあるが、花音の「音の文庫」が病院や施設で「楽しい時間」をつくりだすのもそう遠い先ではない。

今回のプロジェクトは、花音が新しい一歩を踏み出す契機になった。自分たちでできることはできるだけ自分たちで、という姿勢のおかげで、組織としてのパワーも高まった。「音」を通して、花音はコミュニティケアの世界に新しい風を吹き込んでいってくれるだろう。

## ■自分たちの「地域福祉計画」をみんなで作ろう！

### NPO法人 茨城NPOセンター・コモンズ

団体名 茨城NPOセンター・コモンズ  
 代表者 帯刀治  
 設立時期 1998年11月15日  
 目的 茨城県内の民間非営利団体の活動基盤の充実をはかること。  
 所在 茨城県水戸市  
 ホームページ <http://www.npocommons.org>

#### ○プロジェクトの目的と概要

茨城NPOセンター・コモンズは、茨城県内のNPOを支援するNPO法人である。事務局長の横田能洋さんは、大学卒業後、茨城県の経営者協会に勤めていた。1998年のNPO法の設立前後に全国各地で高まったNPO支援組織をつくらうという動きに刺激を受けて、経営者協会を辞め設立したのが、この団体である。

今回は、「自分たちの「地域福祉計画」をみんなで作ろう」プロジェクトである。社会福祉法の改正により、全国の市町村は、住民参加型の地域福祉計画づくりを義務づけられたが、住民参加といっても実際には難しく、ともすれば形式的なものになりがちである。一方、コモンズでは2001年に県内NPOをヒアリングしたが、その時に感じたことは、せっかくのNPOが目先の問題に追われがちで、意外と市民や横の組織とつながっていないということだった。そこで、NPOをうまく活かしていくことで地域福祉計画づくりへの住民参加を効果的なものにしていくとともに、NPO同士を横につなげていく契機にしたいと考えた。

当面の目標は、市民やNPOの意見を反映させた地域福祉計画モデルプランの作成だが、その先にはNPOが横につながっていくことで、みんなが安心して元気で暮らせるコミュニティの実現を見据えたプロジェクトである。

#### ○活動内容と成果

まず取り組んだのが、茨城県内の49のNPOに対する、地域福祉計画への関わり意向を確認するためのヒアリングだった。その結果、計画づくりへの参画に積極的なNPOがたくさんあることがわかった。しかし、日々の活動に追われている、あるいは、市町村がNPOと組むことに積極的でない、などの理由で、実際には計画づくりに参加できないのが実態だということも明らかになった。地域福祉計画づくりにおいては、行政とNPOの連携はあまりうまくいっていないのが現実である。この調査結果は、県の協力を得て中間報告にまとめ各市町村に配布した。

つぎに、住民参加のモデル計画を県内の市町村で実現しようとした。しかし、なかなか、手を挙げる市町村が現れなかった。そこで啓蒙活動の必要を感じ、4月に「地域福祉を考える集い」をひたちなか市で開催した。県、市役所、社会福祉協議会、NPO、市民、自治会など、全部で70人が参加し、地域福祉計画をテーマにワークショップを行った。

肩書きをはずすことによって、参加者から自由で多様な意見が出され、参加した県の担当者もこうした活動に関心を高めてくれた。その結果、県内各地で、「地域福祉を考える会」

を実施する話も生まれている。これによって、市民とNPO、あるいは、NPO同士が横のつながりをもてるようになるのではないかと横田さんは期待している。

また、今回のプロジェクトに参加してくれた団体が、地域福祉計画をテーマにした行政懇談会を実施したり、地域福祉に取り組むNPOネットワーク

が生まれたり、さまざまな活動も始まっている。

目標のモデルプランはまだ実現できていないが、こうした新しい動きの中で、住民主役の地域福祉計画が生まれる素地は確実に育っている。

#### ○これからの展望

現在、ヒアリングで得たNPOの情報や地域福祉計画に市民がどう関われるかをわかりやすく伝えるための冊子を作成中だが、これも活用しながら、県と協力して各地で地域集会を開催し、少しずつ育ってきている住民参加の計画づくりの機運を大きく育てていくことがこれからの課題である。それを通して、NPO活動の支援も広げていけるはずだ。

今回の活動のおかげで、県内のNPO関係の情報が自然に集まってくるようになってきた。これを生かして、いろいろなプロジェクトを仕掛けていき、NPO同士やNPOと行政とのつながりを育てていくことができるようになってきた。

自分たちの地域福祉計画づくりを目指した活動が、茨城県のNPOに新しい風を起こしていくことを期待したい。



## ■異文化マッチング空間「cafe-3-」プロジェクト コミュニティアート・ふなばし

団体名：コミュニティアート・ふなばし

代表者：下山浩一

設立時期：1997年9月1日

目的：創造的なアートプロジェクトの実施によって、すべての人がプライドを持ち、リラックスして暮らせる社会づくりに貢献すること。

所在：千葉県船橋市

ホームページ：http://www.communityart.net



### ○プロジェクトの目的と概要

コミュニティアート・ふなばし代表の下山さんは、大学時代から演劇や音楽が好きで、前衛的なダンスや演劇のワークショップを開催していた。その活動を発展させて、アートとまちづくりの融合をめざそうと立ち上げたのがこの団体である。アートを活かして、コミュニティを元気にしていくことで、「予防的コミュニティケア」（下山さんの造語）のネットワークをつくらうというのが下山さんの構想である。

下山さんは、2002年8月に船橋周辺に住む若者たちと一緒に、誰でもが気楽に集まれる楽しくてカッコいい場所として、月1回の「cafe-3-」を立ち上げた。場所は船橋にあるコミュニティスペース「ひなたぼっこ」、企画運営は10代から20代の若者である。

その「cafe-3-」を舞台に、来場者参加型の異文化交流空間を「cafe-3-」の若いスタッフに創り出してもらおうというのが今回のプロジェクトである。それによって、「cafe-3-」をまちづくり拠点として育てていくことはもちろんだが、若者たちに企画運営を任せることでそれぞれの力を磨かせ、同時にまちづくりのベースになる草の根ワーカーのネットワークを広げていくことが目的である。

### ○活動内容と成果

2002年10月から2003年5月にかけて、「地域を活かすアート拠点」をテーマに、5回の魅力的な「cafe-3-」を開催した。毎回、6時間以上にわたるイベントだったが、若者たちの自由な発想のおかげで、テーマもスタイルも実に多彩で、エネルギーあふれる楽しいイベントが実現した。

イベントの核は、さまざまな実践活動をしているゲストを囲んでのトークライブだが、そのコーディネーターも若手スタッフの役割である。長時間なので、飲食関係の準備もしなければならない。その上、会場の空間設計や実際の仮設作業もスタッフの仕事である。プログラムづくり、ゲストとの交渉、広報、司会などの役割もある。しかも毎回、役割を交代させることによって、スタッフにはできるだけいろいろなことを経験してもらうようになっているため、イベントを重

ねるたびに、若者たちは間違いなく力をつけてきている。まさに教育者としての下山さんの面目躍如である。若者たちにとっては、楽しみながら、実に多くのことを学べる場になったに違いない。

それだけではない。異文化交流とあるように、在住外国人や障害を持つ人たち、さらには地域商店街や起業家など、さまざまな人たちのコラボレーションも、下山さんが重視したことである。実際に、知的障害を持つ若者や日本語学校で学ぶ若い外国人との交流も広がってきている。「cafe-3-」イベントを通じて育まれた人と人の縁は、若者たちにとってだけでなく、これからのまちづくりにとって、大きな資産になっていくだろう。

### ○これからの展望

「cafe-3-」は、地域コミュニティの「人材」が交流する「場」としては、ほぼ完成の場に近づいている。「cafe-3-」プロジェクトで得られた「企画力」「コミュニケーションスキル」「土地勘」を活かして、新しいプロジェクトも次々と生まれつつあるという。

次の課題は、さらに広い世界でのコラボレーションである。下山さんは、船橋の市民団体の集まりである「まちネットふなばし」のメンバーでもある。また10月に開催される三番瀬アートフェスティバル実行委員会の事務局もしている。そうしたネットワークを活かしながら、コミュニティアートや環境といった切り口で、「cafe-3-」プロジェクトをもっと大きなまちづくり活動へと育てていきたいと考えている。

そして、千葉県内で活動している、他の市民セクターとの連携を進め、まちづくりに携わる若者を支援するためのネットワーク組織「まちづくりユースネット」（仮称）を設立するのが下山さんの次の目標である。

さらに、5年後を目標に、コミュニティアートを実践する場として、自前のカフェを確保する夢もある。「cafe-3-」プロジェクトは、若者たちと一緒に、これからもどんどんと大きく育っていきそうである。



## ■湘南市民テレビ局プロジェクト 湘南メディアヴィレッジプロジェクト

団体名：湘南メディアヴィレッジプロジェクト

代表者名前：石元龍太郎

設立時期：2002年5月1日

目的：市民が中心になって、環境、福祉、文化、教育などの要素が複合的に絡み合った豊かなまちづくりに取り組む。

所在：神奈川県藤沢市

ホームページ：<http://www.shonan.tv>

### ○プロジェクトの目的と概要

湘南メディアヴィレッジプロジェクトは、慶應義塾大学で、市民のメディアリテラシー（市民の情報の受発信をする力）と海外でのパブリックアクセス（地域の市民がCATVなどで番組を放送する仕組み）を研究するチームからスタートしたグループである。代表の石元龍太郎さんは、子どもの頃からさまざまな地域活動に参加していたが、その研究の過程で、ぜひ自分の育った湘南地域で実際に市民による情報発信活動に取り組みたいと考えて、このグループを立ち上げた。

グループでは、2002年8月から、「湘南市民ディレクター講座」というワークショップを開催してきた。受講生は高校生から高齢者、障害者と幅広いが、講座を受講すると、自らが企画・取材・出演・編集までを手がけて作品が作れるようになる。その市民ディレクターを中心に、市民による番組作りに取り組み、住民の多様な視点による番組を地元のCATVやインターネット放送で発信していこうというのが今回のプロジェクトである。

そうしたメディアができれば、地域の問題解決にも役立つだろうし、人のネットワークも育っていくだろう。なによりも地域住民をエンパワーする効果は大きい。ぜひとも日本でもパブリックアクセスの仕組みを広げていきたいというのが石元さんの思いだった。

### ○活動内容と成果

市民テレビ局を実現するためには、何よりも市民ディレクターを育てて行かねばならない。すでに開始していた市民ディレクター講座を継続実施し、年度内に3期開催することができた。卒業生も80名になった。

講座では、まずビデオカメラを持って街を歩いてみることから始める。人によって、街の見え方は大きく異なる。それらをお互いに見せあうことで、視点の大切さを学んでいくとともに、楽しさも実感してもらおう。その上で、次第にカメラワークなどにも慣れてもらい、力をつけていってもらおう。講座後半では、地域の問題点や自らが発信したいことを企画書にまとめ、取材を始める。大学生スタッフがサポーターと



してつき、作品をつくっていく。

講座の最後には、受講者が制作した作品の上映会を行っている。個人の問題意識や、メッセージを自分の地域の人に見てもらおう場である。専門のコメンテーターにも参加してもらい、作品をお互いに評価しあう。改めて他人の作品を見ることで創作意欲に刺激を与え、見る力を育てることができる。参加者は、映像が自らの力で作れるという自信と、自らの思いや地域でのほんの些細なことさえも、伝え方によっては面白くなるんだということに気づいていく。

これまでに、障害者自身の視点からの作品や環境へのささやかな取り組みなど、さまざまな市民の作品がインターネットで放送され、反響を呼んでいる。

当初の予定では、地元CATVにものせる計画だったが、残念ながら実現していない。最大の理由はスポンサーを確保できなかったことである。定期的に安定して番組づくりをしていく市民ディレクターの体制もできていなかったことも一因である。まずはインターネットによるブロードバンド放送で力をつけていくことに注力している。

### ○これからの展開

最近、湘南市民テレビ局には、同様の活動に取り組みたいというところからの問い合わせが多い。このような試みへの注目が高まっている表れだろう。時代は間違いなく市民テレビ局を求めている。湘南メディアヴィレッジプロジェクトでは、インターネット放送が月4本で安定してきたので、

これをベースにCATVに再度挑戦していく計画である。

最近、藤沢市から地域資源のデジタルアーカイブとして民俗に関する生活記録を残すことを事業委託されたが、放送以外の活動も広げていく計画だという。学校で始まった総合学習などとも連携していきたいし、市民活動支援の体制もつくっていきたい。すでに環境系のNPOが、自らの活動を促進するために活用したいと言ってきているという。石元さんたちの夢はどんどん広がっている。

解決すべき問題は多いが、市民主役の新しいメディアづくりのモデルになってほしい。



## ■若手ビジネスパーソンと地域をつなぐソーシャルベンチャー支援の場づくり ソーシャルベンチャー・パートナーズ（SVP）東京ベイ

団体名：ソーシャルベンチャー・パートナーズ（SVP）東京ベイ

代表者：井上英之

設立時期：2002年8月1日

目的：ソーシャルベンチャーに対する、立ち上げから自立的経営までの、経営全般にわたる支援。

所在：東京都渋谷区

### ○プロジェクトの目的と概要

ソーシャルベンチャー・パートナーズ（SVP）東京ベイは、その名前の通り、ソーシャルベンチャーを支援する団体である。米国では、ソーシャルベンチャーとビジネスパーソンを結ぶ市場が育ってきている。

代表の井上英之さんはNPO法人ETICのメンバーでもある。2002年のETIC主催のソーシャルベンチャービジネスプランコンテストの企画運営を担当したが、そこで優秀賞を獲得したスローウォーターカフェ（SWC）の起業を実際に支援することを通して、日本でもソーシャルベンチャー・パートナーズの仕組みを実現しようと、SVC東京ベイを設立したのである。

SVPはベンチャーキャピタルの仕組みをモデルにしているが、投資者の目的は利潤ではなくて、自己実現や達成感である。SVPの役割は、ソーシャルベンチャーとそれを支援する人の市場をつくることである。まず、SVPが支援者を募集し、志とビジネススキルを持ったパートナーを集める。パートナーになるには、お金を支払うだけでなく、得意分野で、支援先とともに汗をかく必要がある。一方で、SVPは支援対象団体を選定する。そして、パートナーの中から特定のスキルを持った人を募集し、経営支援チームをつくる。そのチームが、期間を区切って、具体的な支援するのである。

井上さんによれば、お金を支払ってでも、ソーシャルベンチャーの経営支援をしたいという若手ビジネスパーソンは、日本にもたくさんいるそうである。

### ○活動内容と成果

今回のプロジェクトの柱は2つある。SVPの体制づくりと、実際のパイロット支援プロジェクトである。

SVPの体制づくりは、米国モデルを参考にしながらも、日本独自のモデルを構築すべきだと考えている。米国のSVPは、5500ドル（約66万円）の出資をしてパートナーになる。しかし、これではハードルが高すぎて、志を持った若いビジネスパーソンが参加しにくい。そこで、日本では年3万円の会費で、パートナーになれるようにした。5月にSVPを正式に発足させたが、さまざまな分野で活躍している20～30代のビジネスパーソンが20人近く、パートナーと



して登録してくれた。任意組合としてのSVPファンドも成立させた。まずは順調なスタートと言っている。

パイロット支援プロジェクトは、SVP立ち上げの契機になったSWCの支援である。事業内容は、フェアトレードのコーヒー豆を使ったコーヒーショップ出店だが、創業者の思いのこもったソーシャルベンチャーの立ち上げであり、井上さんとしても力が入らざるをえない。現在、ITチームと物販チームをつくり支援活動を展開している。

### ○これからの展開

パイロット支援プロジェクトは計画よりもやや遅れているが、着実に成果をあげている。実際の支援活動を通じて、さまざまな気づきもあった。

SVPに参加している人は、すべて仕事を持っている。そのためSVPに割り当てられる時間は限られており、当然、付き切りにはなれない。したがって、依存関係をつくるのではなく、支援先が自立する方向で支援していくことが大切である。最初はどうしてもやってあげてしまうことが多かったが、それでは本当の意味での支援にはなりにくい。

また、支援先の期待水準と支援者の知識や技術レベルの違いも注意する必要がある。大企業とベンチャーとでは管理スタイルは同じではない。高度すぎる技術やシステムを押し付けるようになっては支援が逆に迷惑にもなりかねない。支援先の実態をみながら、状況に合わせた取り組みが求められる。形だけではなく、実状に合わせた支援に取り組もうとしている井上さんにとっては、まだまだ解決すべき問題は山積みだが、こうした気づきを通して、実践的な日本型SVPのノウハウがどんどん蓄積されだしているようだ。

日本にもソーシャルベンチャーを支援する仕組みが間もなく誕生することは間違いない。

## ■痴呆予防プログラムの実践的検証とその普及方法に関する研究 NPO法人 せたがや福祉サポートセンター（リンク）

団体名：NPO法人せたがや福祉サポートセンター（リンク）

代表者：光岡明子

設立時期：2000年4月7日

目的：人と人、人と組織、組織と組織を柔軟にリンクし、地域に新しい仕組み、新しい働き方をつくること。

所在：東京都世田谷区

ホームページ：<http://www5b.biglobe.ne.jp/~mlink/>

### ○研究テーマと活動概要

リンクは生活クラブ生協のまちづくり活動から始まったグループである。これまで世田谷区にミニデイサロンを次々と広げる推進力となってきたが、こうした活動を通して、社会事業と収益事業を連動させた、新しい働き方や活動のシステムも生み出したいと考えている。

2002年に、東京都老人福祉総合研究所などの協働事業で、痴呆予防講座に取り組んだが、ミニデイが介護予防や健康予防だけではなく痴呆予防にも役立てればという思いから、この問題にさらに踏み込むことを決定。実践の場を多く持っているリンクの強みを生かして、同研究所の開発した「痴呆予防プログラム」を実践的に検証し、その普及実践の土台づくりをしたいというのが、今回の活動の目的である。料理やパソコンなどの活動に取り組むことで、「エピソード記憶」「注意分割力」「企画力」を鍛えていくというのが、同研究所のプログラムだが、当面の目標をその「導入・実践マニュアル」の作成においた。

調査研究活動の推進のために、プロジェクト会議を発足させ、まずは地域活動グループの痴呆問題に対する意識調査を行った。その結果を踏まえて専門家の参加も得て研究活動を開始、並行して現場での実践展開のために、痴呆やその予防に関する連続講座などを開催、老人学や回想法なども学びながら、実践的な検証活動を進めている。

### ○調査研究結果要旨

意識調査の結果、痴呆問題に関する関心は非常に高いが、多くの方が正確な情報を持っていないことが判明した。そこで、地域活動のリーダー層に痴呆予防についての知識や具体的な方法を提供し、実際に体験してもらいながら、痴呆予防プログラムと一緒に研究し、当事者として普及してもらうことになった。当初はマニュアルを開発し、それを講座で学んでもらうことを考えていたが、マニュアル作成への参加こそが、最も効果的な普及活動であると考えたのである。

そこで各地区で予防策についての学習会を開催した。学習会では予防策の学習や痴呆予防活動の事例紹介などを行い、ワークショップ形式で参加者の実践的な知見を集約していくことを重視した。実践からの発想がリンクの最大の強みであ



る。

マニュアルはそうした当事者のノウハウの集約だが、内容については追って発表されるマニュアルに委ねたい（発表次第、ホームページで紹介）。

### ○これからの展望

連続講座や学習会で得た材料をベースに、これから具体的なマニュアル作成に取り組んでいくが、その発表会を年内に開催する予定である。さらに並行して、痴呆予防のモデル活動グループを立ちあげていくことになっている。

現場を持つ実践者を巻き込んだ「共創型プログラム開発」であるため、時間も費用も計画以上にかかっているが、研究活動と実践活動と普及活動が三位一体で展開されており、これからは急速に進んでいくことが期待される。

痴呆問題は、個人によって状況が違い、画一的な枠組みで考えることはできない。現場に立脚した実践的なノウハウや知見の豊富さがプログラムの有効性に影響を与える。

そうした意味で、今回のリンクの取り組み姿勢は高く評価できる。「完成されたマニュアル」ではなく、実践とともに常に成長していく「生きたマニュアル」になっていくだろう。そして、これからも実際の活動の成果を取り込みながら、マニュアルは進化していくはずだ。

リンクにとってはもう一つの成果があった。それは、他の団体や活動との協働の体験である。今回はNPO玉川まちづくりハウスや健康政策研究所などの協働作業を行ったが、それぞれの考え方や行動ルールの違いを認識し、そこから新しい共通のルールの共創していくことは刺激的な体験だったという。団体同士の信頼関係の確立は、これからのコミュニティケア活動の最も重要な課題になっていく。

リンクの輪がさらに大きく広がり、今度はどんな物語を生み出すか楽しみである。

## ■ ポジティブ・ライフのためのセルフ・ディフェンスマニュアルの作成 セルフ・ディフェンス講

団体名：セルフ・ディフェンス講

代表者：木谷和宏

設立時期：2002年7月10日

目的：犯罪被害を回避するノウハウを普及するとともに、意識を地域レベルにまでひきあげ、安全な地域社会づくりに取り組む。

所在：大阪府大阪市

### ○研究テーマと活動概要

代表の木谷和宏さんは日本ガーディアン・エンジェルス(GA)のメンバーである。GAは1979年、ニューヨークの地下鉄での活動から始まった犯罪防止ボランティア活動。日本でも1996年に支部が結成され、「見て見ぬふりはしない」をモットーに安全なまちづくりに向けての自主パトロール活動を各地で行っている。

現在、犯罪に関する分野は行政任せの傾向が強い。しかし、行政に頼っているばかりでいいのか。かつて、ニューヨークが犯罪都市となってしまったのは、市民が犯罪に遭っても被害届けを出さなくなり、周りの犯罪状況にも無関心になったことが理由だといわれる。犯罪のない社会づくりに向けて、市民ができること、やるべきことはたくさんある。そこで木谷さんは、GAでの経験や警察や被害者へのヒアリング調査をベースに犯罪回避マニュアルを作成し、それを使ってフォーラムなどで、地域における犯罪回避への関心を高めていきたいと考えた。

その出発点になるマニュアルづくりが、今回のプロジェクトである。セルフ・ディフェンス講(SD講)は、そうした活動をしていくために木谷さんが呼びかけて発足させたグループである。

### ○調査研究結果要旨

ヒアリング調査を通じ、犯罪被害者がごく身近に、しかも多数いることを改めて実感したという。平成14年度の犯罪認知件数は285万件。国民の43人に1人が1年の間に犯罪に巻き込まれたことになるが、通報されていないものも多く、犯罪は私たちの周りでもかなり「日常化」してきている。なす術なく、泣き寝入りされているケースにも多く出会った。ヒアリングだったにも関わらず、相談や解決に向けての協力要請もあり、こうした活動の必要性を強く感じたという。

「ブローケン・ウィンドー・セオリー」(割れた窓理論)というものがある。割れた窓を修理せずに放置しておく、間もなく他の窓も割られ、無法状態の雰囲気地域社会全体に広がっていく。些細な問題を放置しておくことが深刻な犯罪の呼び水になるという考えだ。ニューヨークの地下鉄は、この理論に基づき、逆に駅の落書き(割れた窓にあたる)を消



すことで犯罪を急減できたといわれる。多くは微罪かもしれないが、日常化した犯罪を放置することは危険だが、残念ながら現在の状況は適切な手が十分に打たれているとは思えない。犯罪のない地域社会を実現するためには、住民一人ひとりが主体的に関心を持って行動を起こしていくことが必要である。

個人の護身よりも、地域社会における犯罪防止の方が情報不足であり、関心が高いことも新しい発見だった。以前は自警団や消防団など、住民主体の活動も多かったが、最近はそのつながりも含めて地域社会は寸断され、見えにくくなってしまった。そうしたことへの不安は予想以上に強い。当初はあまり考えていなかったが、これについてもマニュアルでは重視していく予定である。

具体的な犯罪回避の手立てなどはこれから完成するマニュアルを参照していただきたい(完成次第でホームページで紹介)。

### ○これからの展望

ヒアリングを契機に、マニュアルづくりに参加してくれる被害者も出てきて、内容は充実してきたが、反面、予想以上に時間がかかり、完成は10月になる予定である。

それを材料に年内に公開フォーラムを開催し、今回の成果をできるだけ多くの人たちに伝えるとともに、マニュアルの内容をさらに高めていきたいと木谷さんは考えている。来年には書籍にして出版する計画である。

木谷さんが一番伝えたいのは、「地域の犯罪防止は、誰もが取り組める活動」ということであり、その自信を持ってもらうことだ。この1年で状況は変わりつつあり、多くの自主防犯組織が各地で立ち上がってきている。この動きをさらに加速させ、防犯活動する人たちに勇気を与えることが、SD講の役割である。

マニュアル完成後のSD講の活躍に期待したい。

## メッセージ

**新たな支え合いの輪づくりに向けてコムケアの仲間になりませんか。**

日本は本当に豊かになったのでしょうか。  
私たちは経済的な豊かさを追求するあまり  
何か大切なものをおろそかにしてしまったのではないのでしょうか。

たとえば

お互いに気遣い合うところ。  
人と人との気持ちのつながり。  
物や自然と心との通わせあい。

そして

誰もが安心して気持ちよく生活できる社会。

コムケア活動は

そうしたつながりや社会をみんなで回復して行こうという活動です。  
みなさんもぜひコムケアの仲間になってください。

資金助成プログラム以外にも次のようなプログラムがあります。  
みなさんのご参加をお待ちしています。

コムケアメーリングリスト

コムケアサロン

テーマ研究会

コムケアフォーラム

コムケア活動や各地でのコムケア仲間の集まりの支援

コムケア活動を支援してくれるボランティア（コムケア応援団）も募集しています。

コムケア仲間やコムケア応援団への参加をご希望の方は  
コムケアセンターまでご連絡下さい。

### コミュニティケア活動支援センター

（愛称：コムケアセンター）

東京都文京区本郷3-37-8本郷春木町ビル9階

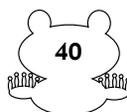
〒113-0033

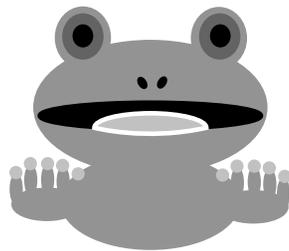
電話：03-5689-0957

Eメール：comcare@nifty.com

ホームページ：<http://homepage2.nifty.com/comcare/>

コムケア活動は住友生命社会福祉事業団の支援によって展開されています。





ケアップくん

ケアップくんは、おおざっぱで細かいことを気にしない、昼寝の大好きなカエルです。困った人をほっておけないタイプのお人好しなのですが、やりたいと思ったことには臆目もふらずに突き進んでしまう一本気なところもあります。

広い田圃のなかで、一人で悪戦苦闘しているようにも見えますが、ひとたび彼が歌い出すと、どこからともなく様々な声が呼応して、いつのまにやら大合唱になるのです。

<http://homepage2.nifty.com/comcare/>

2003年10月10日

コムケア応援団

安藤千賀、飯沼勇一、井上英之、小川清史、鎌田芳郎、亀ヶ谷一寿  
河野和子、菅野弘達、久保崎由子、小林香織、小山美代、佐々木理代  
佐藤ジュン、志村幸恵、新谷大輔、鈴木淳、鈴木政孝、瀬谷重信  
田中あけみ、中村岳一、那須直樹、錦織一臣、西村佳子、西村美和  
早坂宏、宮前愛美、宮川元則、安江由美子、吉原宏美、宮田穰、渡邊早苗

資金助成プログラム選考委員

片岡勝、北矢行男、木原孝久、高橋流里子、町田洋次、松原優佳

コムケアセンタースタッフ

佐藤修、佐藤泰弘、橋本典之、佐藤ユカ、宮部浩司、大川新人、佐藤隆

デザイン

宮部浩司

企画

佐藤修

発行（照会先）

**コミュニティケア活動支援センター**

東京都文京区本郷3-37-8本郷春木町ビル9階

〒113-0033

電話：03-5689-0957

Eメール：comcare@nifty.com

ホームページ：<http://homepage2.nifty.com/comcare/>

この報告書は住友社会福祉事業団の支援によって作成されました。